

# 和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報

－平成21年度(2009年度)－

2012

財団法人 和歌山市都市整備公社

# 序 文

本書は、財団法人和歌山市都市整備公社が平成21年度（2009年度）に行った和歌山市内の遺跡発掘調査の概要をまとめたものです。

調査の結果、川辺遺跡において弥生時代中期の溝などを確認しました。田屋遺跡では、古墳時代前期の竪穴建物や溝、土坑など集落関係の遺構を確認しました。六十谷遺跡においては、平安時代の溝、鎌倉時代の溝が見つかりました。史跡和歌山城においては、江戸時代初頭の浅野氏時代の石垣を前年度に続き確認したほか、江戸時代後期に描かれた『和歌山城御城内惣御絵図』にみえる二の丸（大奥）の礎石建物を初め、坪庭の漆喰池などさまざまな施設跡を確認しました。また雑賀崎台場跡においては、江戸時代末期に和歌山藩が海岸防御施設の基礎となる石積みを確認し、当時の土木技術などを知る上で貴重な資料を得ました。

以上、当財団の調査による新たな調査成果は、郷土の歴史を語る上でなくてはならない重要な視点を与えることになりました。本書が私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにすることを願ってやみません。

発掘調査にあたって御協力をいただいた地元の皆様及び本書編集にあたり種々の御教示を賜りました方々に厚く御礼申し上げます。

平成24年(2012年) 1月20日

財団法人 和歌山市都市整備公社

理事長 垣 本 省 五

# 例 言

1. 本書は、平成21年度（2009年度）に財団法人和歌山市都市整備公社が実施した和歌山市内における埋蔵文化財発掘調査事業の概要を掲載する。
2. 本書に掲載の調査については、既に報告書が刊行されたものもある。未完のものについては報告書が刊行された際に、その報告をもって正式報告とする。
3. 本書の執筆については、執筆分担の文責を文末に記載し、編集は奥村薫が行った。
4. 埋蔵文化財発掘調査及び本年報作成を行った各年度の埋蔵文化財班職員構成は以下の通りである。

## 埋蔵文化財発掘調査年度

【平成21年度（2009年度）】

### 埋蔵文化財班

班 長（学芸員）	北野隆亮
主 査（学芸員）	井馬好英
主 任（学芸員）	奥村 薫
主 任（学芸員）	藤藪勝則

## 年報作成年度

【平成23年度（2011年度）】

### 埋蔵文化財班

班 長（学芸員）	北野隆亮
主 査（学芸員）	井馬好英
主 査（学芸員）	藤藪勝則
主 任（学芸員）	奥村 薫
非常勤職員（学芸員）	櫻田小百合
非常勤職員（学芸員）	内田和典（8月1日から）
非常勤職員（調査補助員）	中野圭子（6月1日から10月31日まで）

# 本文目次

I. はじめに	
平成21年度（2009年度）の調査	1
II. 埋蔵文化財の発掘調査概要	
1. 六十谷遺跡発掘調査	2
2. 川辺遺跡第13次調査	6
3. 史跡和歌山城第32調査	8
4. 川辺遺跡第14次調査	16
5. 田屋遺跡第3次調査	18
6. 雑賀崎台場跡第3次調査	22
7. 鳴神V遺跡第11調査	26
III. 普及啓発活動	30



# 和歌山市遺跡地名表

(「和歌山県遺跡地名表」和歌山県教育委員会<2005年>より作成。) H.9

遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称	遺跡番号	名 称
1	報恩講寺遺跡	47	榎原遺跡	98~102・104	北山古墳群	170	奥池遺跡	255	吉礼Ⅲ遺跡	306	坂田地蔵山古墳	358	山東中遺跡	394	城山遺跡
2	大川西方遺跡	48	中野遺跡	103	北山Ⅱ遺跡	171	高積山遺跡	256	千石山遺跡	307	神前遺跡	359	加太Ⅱ遺跡	395	岡村遺跡
3	藻江遺跡	49	城山古墳	105~117	直川八幡山古墳群	172	薬徳寺跡	257~259	井戸古墳群	308	井辺遺跡	360	雨が谷遺跡	396	室山古墳群
4	しょうぶ谷遺跡	50	権現山1号墳	118	八王寺山古墳群	173	城ヶ峯城跡	260	馬場古墳群	309	岡崎縄文遺跡	361	冬野遺跡	397	木ノ本Ⅳ遺跡
5	水谷遺跡	51	権現山2号墳	119	橘谷Ⅰ遺跡	174	禰宜Ⅰ遺跡	261	馬場遺跡	310	森小手穂埴輪窯跡	362	鳴滝遺跡	398	府中Ⅳ遺跡
6	男良の谷遺跡	52	高芝遺跡	120	橘谷Ⅱ遺跡	175	禰宜Ⅱ遺跡	262~265	東池古墳群	311	大日山Ⅰ遺跡	363	園部円山古墳	399	平井遺跡
7	深山遺跡	53	高芝古墳群	121	橘谷Ⅲ遺跡	176	禰宜貝塚	266	吉里銅鐸出土地	312	井辺Ⅰ遺跡	364	西庄Ⅱ遺跡	400	深谷池北遺跡
8	大谷川遺跡	54	栄谷貝塚	122	橘谷銅鐸出土地	177	河南中学校北方遺跡	267	小山古墳	313	井辺Ⅱ遺跡	365	永山遺跡	401	名草池北遺跡
9	加太遺跡	55	貴志古墳	123	弘西遺跡	178	和佐中遺跡	268	奥須佐窯跡	314	鳴神Ⅱ遺跡	366	永山古墳	402	湯谷池西遺跡
10	加太南遺跡	56	川原崎遺跡	124	北田井遺跡	179	和佐寺跡	269	円満寺古墳	315	鳴神Ⅲ遺跡	367	井辺Ⅲ遺跡	403	平野池南遺跡
11	平の谷遺跡	57~59	川原崎古墳群	125~127	別所古墳群	180・181	禰宜古墳群	270	峯古墳	316	鳴神Ⅳ遺跡	368	紀三井寺遺跡	404	北野池北遺跡
12	田倉崎Ⅰ遺跡	60	国有本遺跡	128	上野古墳群	182	和坂古墳	271	西光寺窯地	317	鳴神貝塚	369	奥山田遺跡	405	山吹丁遺跡
13	田倉崎Ⅱ遺跡	61	大谷古墳	129~139	山口古墳群	183	和佐古墳群	272	吉里1号窯跡	318	鳴神Ⅴ遺跡	370	朝日石槍出土地	406	友田町遺跡
14	船出遺跡	62・64・65	晒山古墳群	140	山口廃寺跡	184	花山古墳群	273	吉里2号窯跡	319	音浦遺跡	371	深山要塞跡	407	津湊Ⅱ遺跡
16	加太駅北方遺跡	63	慶円寺裏山古墳	141	中筋日延遺跡	185	岩橋千塚古墳群	274	頭陀寺古墳	320	鳴神Ⅵ遺跡	371-1	深山第1砲台跡	408	和田Ⅱ遺跡
17	藻崎北浜遺跡	66	雨が谷古墳群	142	山口遺跡	186	井辺前山古墳群	275	頭陀寺遺跡	321	岩橋遺跡	371-2	深山第2砲台跡	409	岩橋Ⅲ遺跡
18	藻崎南浜遺跡	70	楠見遺跡	143	谷遺跡	187	寺内古墳群	276	大將軍窯跡	322	栗栖Ⅰ遺跡	371-3	男良砲台跡	410	前山B226号墳
19	藻崎西浜遺跡	71	鳴滝古墳群	144	里遺跡	188	森小手穂遺跡	277	有ノ木窯跡	323	栗栖Ⅱ遺跡	372	加太砲台跡	411	前山B227号墳
20	神前東浜遺跡	72	奥出古墳	145	川辺遺跡	189	寺内ナイフ形石器出土地	278	宝光寺跡	324	高橋神社遺跡	373-1・2	田倉崎砲台跡	412	城ノ前1号墳
21	神前西浜遺跡	73	有功経塚	146	藤田古墳	190	頭陀寺ナイフ形石器出土地	279・280	松原古墳群	325	紀の川銅鐸出土地	374	虎島砲台跡	413	境原遺跡
22	屋敷浜遺跡	74	園部Ⅰ遺跡	147	碓古墳	209~215	山東古墳群	281	滝ヶ峯古墳群	326	有本銅鐸出土地	375	友ヶ島要塞跡	414	薬勝寺Ⅱ遺跡
23	おそ越の鼻遺跡	75	園部古墳	148	藤田遺跡	218	若林古墳群	282	滝ヶ峯遺跡	327	太田・黒田遺跡	375-1	友ヶ島第1砲台跡	415	本渡遺跡
24	一谷色遺跡	76	園部Ⅱ遺跡	149	宇田森遺跡	219	吉礼砂羅谷窯跡	283	薬勝寺南山古墳群	328	吉田窯跡	375-2	友ヶ島第2砲台跡	416	明王寺遺跡
25	柏の浜遺跡	77	有功遺跡	150	上野廃寺跡(紀伊薬師寺跡)	220~222	平尾古墳群	284	仁井辺遺跡	329	鷺ノ森遺跡	375-3	友ヶ島第3砲台跡	417	平尾遺跡
26	深蛇池遺跡	78	池田遺跡	151	上野遺跡	226	楠古墳群	285	薬勝寺跡	330	鷺ノ森窯跡	375-4	友ヶ島第4砲台跡	418	滝ヶ峯Ⅱ遺跡
27	垂水遺跡	79	有功古墳	152	上黒谷遺跡	227	足守神社古墳群	286	薬勝寺遺跡	331	秋月遺跡	375-5	友ヶ島第5砲台跡	420	太田城水攻め堤跡
28	神島遺跡	80	大同寺墳墓	153	北野窯跡	228	赤山古墳	287	松原Ⅰ遺跡	332	津湊遺跡	376	行者堂東遺跡	421	木広町遺跡
29	沖の島北方海底遺跡	81	大同寺古墳	154	北野遺跡	229~233	塩谷古墳群	288	松原Ⅱ遺跡	333	岡の里遺跡	377	松江経塚	422	朝日蔵骨器出土地
30	野奈浦遺跡	82	大同寺遺跡	154-2	北野Ⅱ遺跡	234	新出古墳	289	薬師谷遺跡	334	関戸遺跡	378	狛口石岩陰遺跡	423	上黒谷Ⅱ遺跡
31	ハイブの浦遺跡	83	法然寺遺跡	155	若宮池遺跡	235	明王寺経塚	290	江南遺跡	335	関戸古墳	379	和歌山城跡	424	東田中遺跡
32	浜遺跡	84	六十谷遺跡	156	上三毛遺跡	236	矢田古墳	291	曾垣田遺跡	336	天神山古墳	380	山口御殿跡	425	雑賀崎台場跡
33~35	磯の浦古墳群	85	和田遺跡	157	下三毛遺跡	237	北池古墳	292	曾垣田Ⅱ遺跡	337	秋葉山貝塚	381	岩橋Ⅱ遺跡	426	小豆島西遺跡
37	磯脇遺跡	86	西辻遺跡	158	小山古墳	238~240	殿山古墳群	293	曾垣田古墳	338	アンドの鼻古墳	382	本願寺跡	427	岩橋高柳遺跡
38	西庄遺跡	87	川口遺跡	159	寺山古墳群	241	土井山古墳	294	城の前Ⅱ遺跡	339~342	三田古墳群	383	神前Ⅱ遺跡	428	和坂南垣内古墳群
39	平の下遺跡	88	六十谷古墳群	160	東国山古墳群	242	丸山古墳	295	城の前Ⅰ遺跡	343	吉原古墳	384	高松焼窯跡	429	栄谷遺跡
40	木ノ本Ⅰ遺跡	89	直川遺跡	161	宮山古墳群	243	高岡古墳	296	大池遺跡	344	広原古墳	385	奥山田古墳群	430	西庄Ⅲ遺跡
41	木ノ本Ⅱ遺跡	90	直川廃寺跡(明光寺跡)	162	小倉古墳群	244	桜山古墳	297	赤津古墳群	345	内原古墳	386	大池遺跡	431	砂山南土師器出土地
42	木ノ本Ⅲ遺跡	91	高井遺跡	163	小倉9号墳	245	伊太折曾神社古墳群	298	吉礼貝塚	346	内原遺跡	387	大旗山城跡	432	旧聖社境内和鏡出土地
43	木ノ本経塚	92	鳥井遺跡	164	明楽古墳群	246	チシヨ古墳	299	西吉礼遺跡	347	名草貝塚	388	西田井遺跡	433	今福尖頭器出土地
44-1	釜山古墳	93	田屋遺跡	165	小倉神社1号墳	247~249	城ヶ森古墳群	300	東吉礼遺跡	350	高津子山古墳	389	井ノ口遺跡	434	有本土器出土地
44-2	車駕之古址古墳	94	府中Ⅱ遺跡	166	小倉神社2号墳	250	城ヶ森遺跡	301	和田遺跡	352	金谷廃寺跡	390	神波遺跡	435	坂田遺跡
44-3	茶臼山古墳	95	府中Ⅲ遺跡	167	モント古墳群	251	相坂古墳	302	和田岩坪遺跡	353	興徳寺跡	391	永穂遺跡	指1	史跡和歌山城
45	木本小学校Ⅰ遺跡	96	府中遺跡	168	小倉神社境内遺跡	252・253	千石山古墳群	303・304	和田古墳群	356	太田城跡	392	楠本遺跡		
46	木本小学校Ⅱ遺跡	97	北山Ⅰ遺跡	169	金谷遺跡	254	菖蒲谷遺跡	305	竈山神社古墳	357	山崎山古墳群	393	吉田遺跡		

# I. はじめに

## 平成21年度（2009年度）の調査

和歌山市における平成21年度（2009年度）の財団法人和歌山市都市整備公社の発掘調査受託事業は7件、出土遺物整理受託事業が2件である。

調査に至った原因としては、店舗建設などの民間受託が3件に対して遺跡範囲確認調査などの公共的な調査が4件を数え、前年度とほぼ同じ傾向である。特に公共関係の調査は確認調査が主体を占めたといえる。

公共関係の調査では、史跡和歌山城二の丸（大奥）などの史跡整備関連調査が行われた。

これらの調査で、いくつかの重要な成果が得られているので以下にまとめることとする。

### 弥生時代

六十谷遺跡でピット、川辺遺跡第13次調査で中期の溝などを確認した。

### 古墳時代

田屋遺跡第3次調査において前期の竪穴建物、溝、土坑など居住域を示す遺構を確認した他、鳴神V遺跡第11次調査において前期の溝を検出した。

### 平安時代

六十谷遺跡発掘調査において後期に埋没した溝を検出、緑釉陶器碗などが出土した。

### 鎌倉時代

六十谷遺跡発掘調査において前期の溝を確認した。

### 江戸時代

史跡和歌山城第32次調査では、江戸時代初頭の浅野氏時代の石垣を前年度に続き確認したほか、江戸時代後期に描かれた『和歌山城御城内惣御絵図』にみえる二の丸（大奥）の礎石建物を初め、坪庭の漆喰池など、さまざまな施設跡を確認した。また雑賀崎台場跡第2次調査では、土塁や石垣で囲まれた江戸時代末期の防御施設における石垣の構造や防御施設内の整地の様相を確認した。

### 【2009年度調査一覧表】

番号	調査名	原因	調査期間	面積(㎡)	調査概要	担当者名
1	六十谷遺跡発掘調査	個人車庫	2009.4～5	43	弥生時代のピット、古墳時代の溝・ピット、鎌倉時代の整地層及び溝等を検出。	藤敷
2	川辺遺跡第13次調査	大規模開発	2009.5～6	139.3	中世以前の灌漑用水路とみられる溝を検出。弥生時代中期頃の溝等の遺構を検出。	井馬
3	史跡和歌山城第32次調査	史跡整備	2009.8～12	178	二の丸「大奥」跡において、江戸時代後期の漆喰池及び排水溝などを検出。	北野
4	川辺遺跡第14次調査	確認調査	2009.10～12	50	奈良時代から鎌倉時代の遺構面において溝・ピットを検出。	井馬
5	田屋遺跡第3次調査	道路建設	2009.11～12	100	古墳時代前期の竪穴建物、溝、土坑、平安時代のピットなどを検出。	藤敷
6	雑賀崎台場跡第2次調査	遺跡確認	2010.1～2	39.3	江戸時代末期の土塁、石垣で囲まれた防御施設の調査。石垣の構造や防御施設内の整地の様相と確認。	藤敷
7	鳴神V遺跡第11次調査	開発計画	2010.2	21	古墳時代前期の溝と鎌倉時代のピットを検出した。また、調査地北部及び東部には平安時代から鎌倉時代の居住域が想定される。	井馬

## Ⅱ. 埋蔵文化財の発掘調査概要

### 1. 六十谷遺跡発掘調査

調査地 和歌山市六十谷357-3

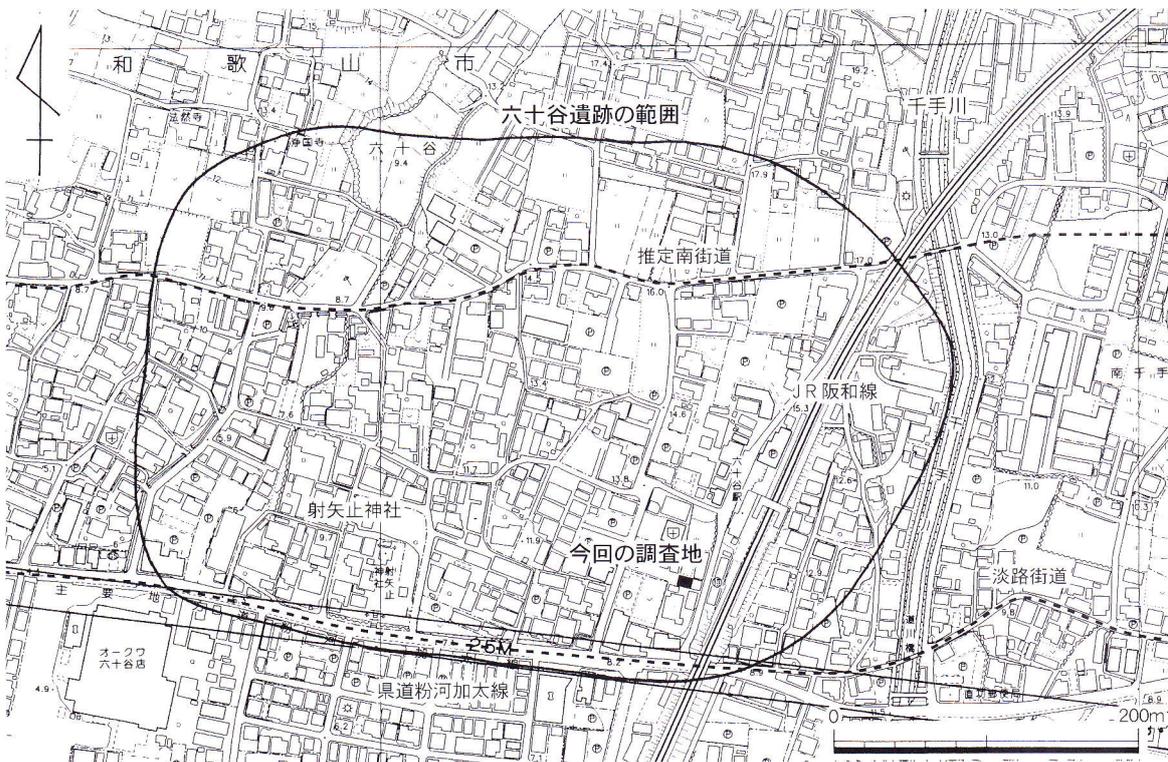
調査面積 43m<sup>2</sup>

#### 位置と環境

今回の調査地は、紀ノ川の北岸部、県道粉河・加太線とJR阪和線が交差する北側約50m、JR六十谷駅西口の南西約50mに位置し、駅前周辺の住宅密集地内に位置する。

六十谷遺跡は、和泉山脈から南流する千手川によって形成された西側扇状地の南端部に立地し、南北360m、東西550mの範囲に広がる遺跡である。遺跡が立地する扇状地は、その末端部が県道粉河・加太線付近となり、東は千手川に南は県道粉河・加太線に向かって断崖面を形成し、西へは緩傾斜地となる。よって調査地周辺は、扇状地内でも高所に位置し、県道粉河・加太線に向かって落ち込む断崖端部の傾斜地となる。本遺跡は、これまで発掘調査が行われたことがなく遺跡の存続時期や内容についての詳細は明らかとなっていない。しかしながら遺跡内部の地表面踏査において、千手川の堤防から縄文時代晩期の土器や石棒の頭部が見つかっており、また射矢止神社の東及び北側では、弥生時代中期のものを主体とする前期から後期までの弥生土器の他、石庖丁やサヌカイト製の石鏃及び石錐などの石器が多数表採されている。これらの弥生時代遺物の散布状況が射矢止神社周辺に集中することから、この付近に弥生集落の中心が想定されている。また古墳時代では、朝鮮半島から持ち運ばれたと考えられる家形甕が出土している。

これらの遺物からみて六十谷遺跡は、縄文時代晩期から弥生時代にかけての集落遺跡であり、さ



調査位置図

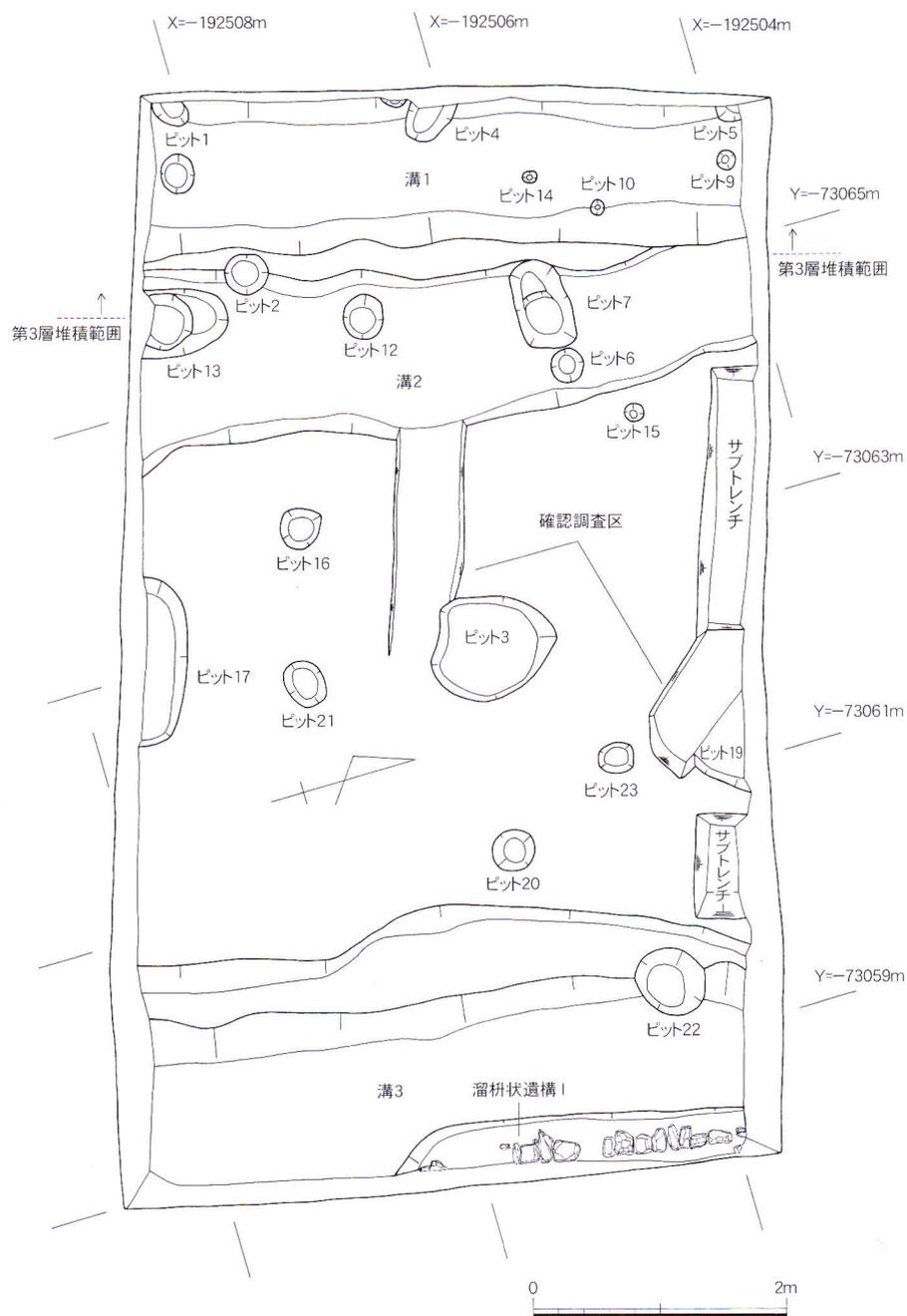
らに古墳時代では朝鮮半島系の遺物が副葬された古墳が存在すると考えられている。

六十谷遺跡内にはこの他、遺跡の北半部、調査地の北約200mを古代南海道が東西に横断しており、さらに遺跡の南限である県道粉河・加太線は淡路街道（淡島街道）であり、これらの遺跡の性格を特色づけると考えられる街道を含んでいる。

### 調査内容

今回の調査は、東西8.6m×南北5.0mの調査区を2分割し反転掘りによって行った。よって便宜上、西側を第1区、東側を第2区とし調査したが、平面図については第1・2区をまとめて図示した。

調査地の基本層序は、現表土として調査地全面に厚さ26~66cmを測る造成土が堆積しており、こ



第5層上面遺構全体平面図

の造成土を除去した下面が現代の耕作土（第1層）である。第2層は、江戸時代の耕作土と考えられる灰黄褐色の粗砂混シルトであり、第3層は鎌倉時代の整地層と考えられる灰黄褐色の粗砂混礫で調査区西端部においてのみに確認できる。第4層は部分的に薄く堆積するにぶい黄褐色の細砂混シルトであり、第5層は5cm大の砂岩礫や明黄褐色の砂岩風化礫を多く含む灰黄褐色の粗砂混礫である。この第5層は、後述する第6層と土色及び土質を比較した結果から判断して遺物包含層である可能性が高い。また第5層上面は、弥生時代から江戸時代にかけての遺構を検出した遺構検出面である。さらにサブトレンチによる下層調査において確認した第6層は、5cm大の砂岩礫を多く含む黄褐色の粗砂混礫であり、遺跡が立地する扇状地を形成する基盤層と考えられる。

遺構は、第5層上面において弥生時代前期から江戸時代にかけての溝及びピット、また掘方を伴う溜枳状遺構を検出した（写真1・2）。遺構検出面の標高は緩やかに東から西に向かって低く傾斜し、南北の傾斜は認められなかった。検出した遺構のうち弥生時代のものでは、前期のピット13、中期のピット2の他、ピット17がある。また古墳時代では前期のピット7・12、中期以前の溝2、中期のピット22の他、ピット1・4・19・20などがある。さらに平安時代の遺構では後期の溝1があり、鎌倉時代のものでは前期の溝3などがある。その他、江戸時代のものでは溜枳状遺構1がある。

以下、主な遺構についてその概要を記述する。

#### [弥生・古墳時代の遺構]

調査区の南西隅部で検出したピット13は、長径70cm以上、短径54cm、深さ11cmを測るもので、遺構覆土は砂岩風化礫を含む黒褐色の粗砂混シルトである。遺構の時期は、覆土内から紀伊第I様式に位置づけられる弥生土器の壺が出土したことから弥生時代前期のものと考えられる。

調査区の西半部で検出した溝2は、検出長4.9m、幅0.9~1.4m、深さ5cm前後を測るもので、その方向性はN-9°-Eである。遺構覆土は2単位に細分でき、第1層が暗灰黄色の粗砂混シルト、第2層が黒褐色の粗砂混シルトである。遺構の時期は、覆土内から古墳時代の土師器が出土したことや遺構の重複関係などから古墳時代中期以前と考えられる。

調査区の北東隅部で検出したピット22は、長径58cm、短径50cm、深さ33cmを測るもので、遺構覆土は砂岩風化礫を含む黒褐色の粗砂混シルトであり、特筆すべきこととして丸底I式の製塩土器を多数（22片）含むものである。遺構の時期は、覆土内から古墳時代中期の土師器杯や高杯脚部の他、丸底I式の製塩土器が出土したことから古墳時代中期のものと考えられる。

#### [平安・鎌倉時代の遺構]

調査区の西壁際において東側肩部を検出した溝1は、検出長4.6m、検出幅1.3m、深さ16~30cmを

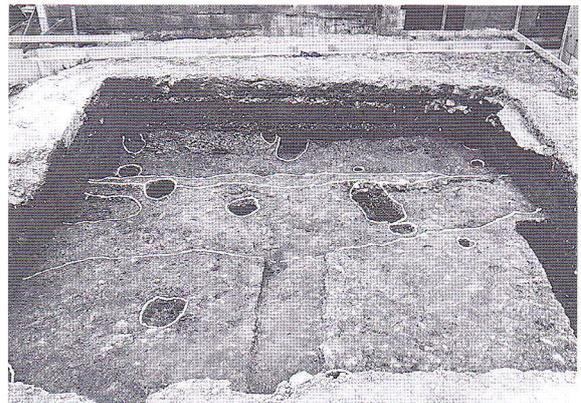


写真1 第1区全景（東から）



写真2 第2区全景（西から）

測るもので、その方向性はN-14°-Eである(写真3)。遺構底面の標高は、北端部で13.0m、南端部で12.9mを測ることから、北から南に向かって約10cmの比高差で低く傾斜する。

遺構覆土は黒褐色粗砂混シルトの単一層であり、覆土内から平安時代後期のものとみられる土師器皿や瓦器椀、中国製白磁碗などが一定量出土した他、平安時代前期のものとみられる緑釉陶器の椀なども出土した。よってこの溝は、平安時代後期に埋没したものと考えられる。

調査区の東壁際において西側肩部を検出した溝3は、検出長4.7m、検出幅2.0m、深さ27~43cmを測るもので、その方向性はN-14°-Eである(写真4)。また遺構底面の標高は、北端部で13.0m、南端部で12.9mを測ることから、北から南に向かって約10cmの比高差で低く傾斜する。

さらに遺構覆土の上位から、平安時代後期の中国製白磁碗及び鎌倉時代前期の土師器皿、瓦器椀の他、中国製青磁碗及び皿などが出土した。よってこの溝は、鎌倉時代前期に最終埋没したものとみられ、掘削時期は平安時代後期に遡る可能性がある。

遺物は、各時代の遺構覆土や第2~4層の遺物包含層から収納コンテナに3箱分が出土した。これらの遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・製塩土器・黒色土器・緑釉陶器・瓦器・中世土師器・中国製陶磁器・近世土師器・国産陶磁器・瓦・土製品・石器・銭貨がある。

遺物は、各時代の遺構覆土や第2~4層の遺物包含層から収納コンテナに3箱分が出土した。これらの遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・製塩土器・黒色土器・緑釉陶器・瓦器・中世土師器・中国製陶磁器・近世土師器・国産陶磁器・瓦・土製品・石器・銭貨がある。

## まとめ

今回の調査では、鎌倉時代に行われた整地の痕跡(第3層)を検出し、また第5層上面において弥生時代前期から江戸時代までの遺構及び遺物を多数確認した。まず鎌倉時代の整地層と考えられる第3層は、調査区の西側に広がるとみられる屋敷地の整地に伴うものと考えられ、溝3は屋敷地の東限を区画する溝であった可能性がある。次に第3層下面で検出した溝1は、溝3と方向性や遺構底面の標高及び傾斜方向など多くの共通する要素をもつ溝である。よって、溝1は溝3が掘削される以前に屋敷地の東限を区画する溝であった可能性が高い。今回の調査で出土した遺物は、弥生時代前期から江戸時代までの長期にわたるもので、六十谷遺跡が複合遺跡であることを示している。そのうち弥生土器では、前期から後期までのものが一定量出土した他、サヌカイト製の打製石鏃及び剥片が多数出土した。これらについては、過去に採集された遺物の中心時期が弥生時代であることと矛盾しない。また今回の調査では、弥生時代前期から中期の遺構を確認した。これらの遺構及び遺物は、六十谷遺跡のある一時期の様相として弥生時代集落の存在を示すものである。

(藤藪勝則)

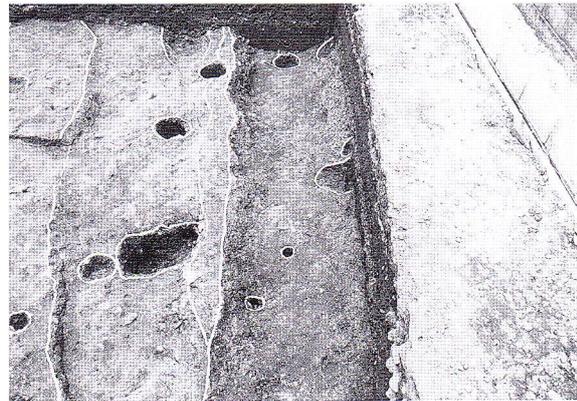


写真3 溝1(北から)



写真4 溝3(北から)

## 2. 川辺遺跡 第13次発掘調査

調査地 和歌山市里字五段9番1・10番1

調査面積 139.3㎡

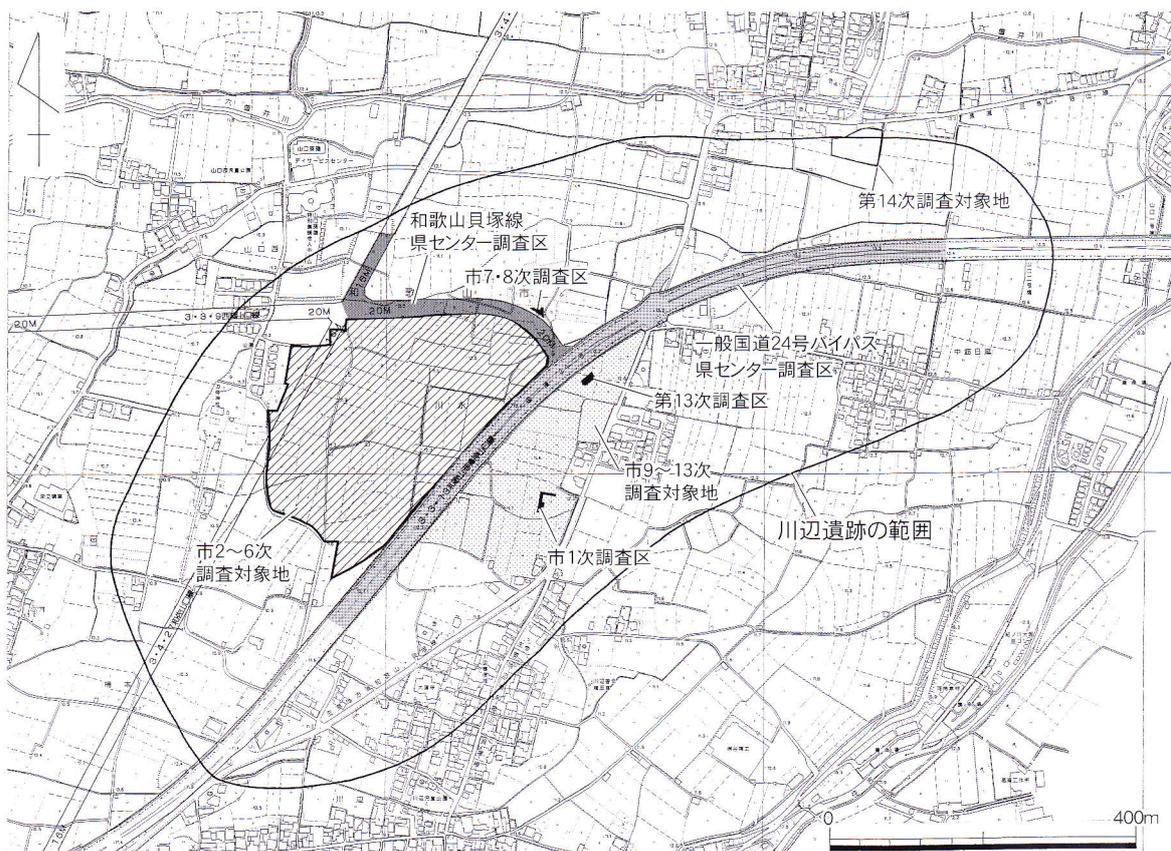
### 位置と環境

和歌山市域の東端部にあたる和歌山市川辺及び里周辺に所在する川辺遺跡は、紀ノ川北岸の標高11.50m前後の沖積平野に立地する遺跡である。この遺跡は東西約1km、南北約650mの範囲をもち、縄文時代から中世にかけての大規模な集落遺跡として知られている。川辺遺跡におけるこれまでの調査では、縄文時代晩期の土器棺墓や弥生時代中期の竪穴建物及び方形周溝墓、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴建物や古墳時代後期末から飛鳥時代にかけての竪穴建物及び掘立柱建物、中世の掘立柱建物や土葬墓など多数の遺構が検出されている。そして、遮光器土偶などを含む多量の遺物が出土し、遺跡範囲のなかでも各時代によって地域差がみられ、各時代の集落が重なり合う大規模な複合遺跡としての様相も明らかとなりつつある。

### 調査内容

この調査は、一般国道24号バイパス東側における大規模開発計画を起因とするものであり、平成20年度に行った第10～12次調査の追加調査（第13次調査）として平成21年度に実施した調査である。

調査地の基本層序については、第10～12次調査の層序を参考として褐色粒を多く含む鎌倉時代の堆積層（第4層）と飛鳥時代から奈良時代を中心とする遺構面のベース層（第6層）を基準層とと



調査位置図（第13次調査区及び第14次調査対象地）

らえてこれらの層位関係から堆積した時代を判断し、各調査区の対応関係を考えて層位番号を付した。本調査区では、これまでの調査区とは異なり既に造成工事が行われていたことから現代の水田耕作土（第1層）の上部に盛土（約1.2m）が堆積していた。

今回の調査で検出した遺構面は、第6a層上面の第1遺構面とサブトレンチ内において検出し、できる範囲のなか拡張して調査を行った第6b層上面の第2遺構面がある。

以下、各遺構面について説明する。

#### 〔第1遺構面の調査〕（写真1）

第1遺構面ではベースとなる第6a層上面が調査区の中央部を東から西に向かって緩やかに下降する状況にあり、この落ち込みが第11次調査第4区において検出していた微高地部と微低地部の境界にあたるラインと考えられた。また、遺構は南西壁面下において調査区を縦断する溝1条の他、土坑2基を検出した。ともに遺構時期を限定できる遺物は出土していない。

#### 〔第2遺構面の調査〕（写真2）

第2遺構面では調査区北半部を中心として溝及び溝状遺構3条を検出した。溝内部からは弥生土器の細片が出土し、層位的にみて弥生時代中期以前の遺構と考えられる。

今回の調査において出土した遺物は、遺物包含層や遺構覆土から出土したものが遺物収納テナ2箱分あり、その種類には、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、中世土師器、中世須恵器、国産陶磁器、瓦、石器などがある。また遺物の出土傾向は、種類の多いものの、量的には同対象地で行った第10～12次調査のなかでは比較的少なく、主として遺物包含層である第5層から出土している。特に、遺構出土の遺物は細片が多く、時期判定が困難な状況である。

#### まとめ

今回の調査において確認した第1遺構面の遺構は、その西側の第11次調査第5区で検出した遺構に繋がるものや類似するものであり、中世以前の遺構群と考えられる。なかでも南西壁面下で検出した溝63は、第5区で検出した溝6の延長部と考えられる溝で、直線的にのびる灌漑水路の可能性が考えられる。また第2遺構面で検出した溝等の遺構群は、第9次確認調査第4区で確認していた第6b層上面を遺構面とするもので、弥生時代中期頃の遺構面と位置づけられる。（井馬好英）

#### 【参考文献】

『川辺遺跡第4・5・6次発掘調査報告書』財団法人和歌山市都市整備公社 2008年

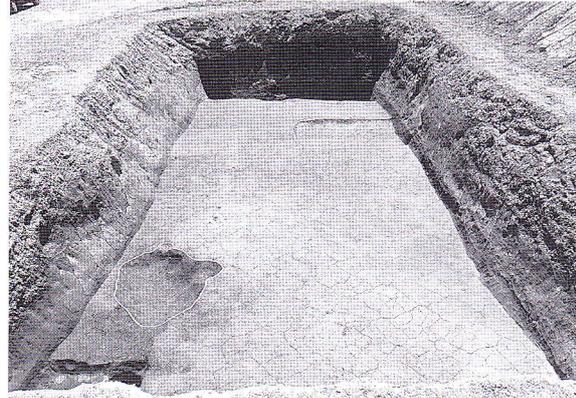


写真1 第1遺構面全景（北東から）

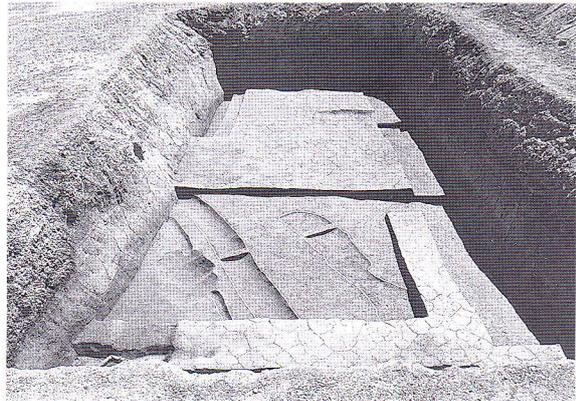


写真2 第2遺構面全景（北東から）

### 3. 史跡和歌山城 第32次調査

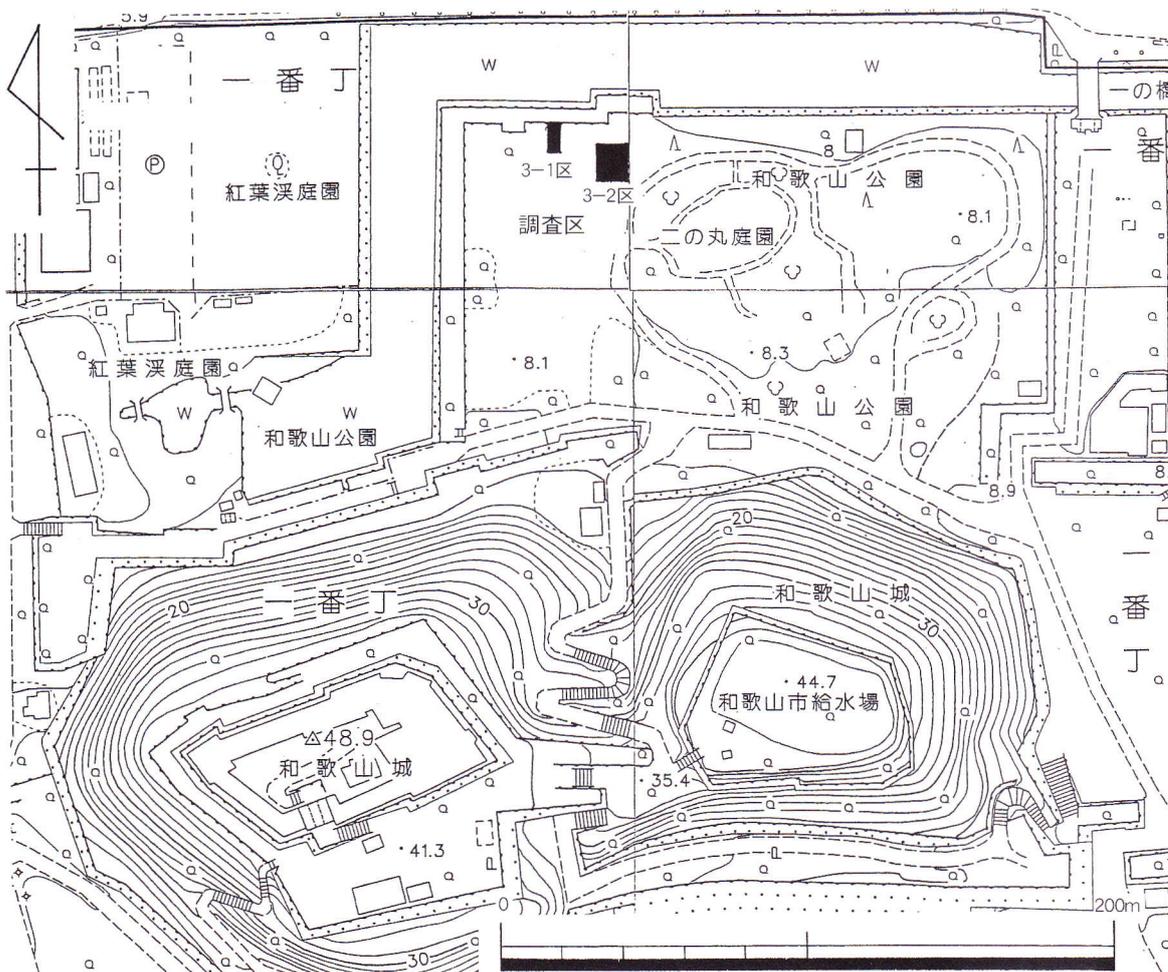
調査地 和歌山市一番丁3番地

調査面積 178m<sup>2</sup>

#### 位置と環境

和歌山城は紀ノ川下流域南岸の平野部に位置する独立丘陵、岡上に築かれた平山城である。天正13（1585）年に紀州を領有した羽柴（豊臣）秀吉によって築城が開始された和歌山城は、桑山重治を城代として本丸周辺を中心として築城が進められたとされ、慶長5（1600）年に関ヶ原の戦いで軍功のあった浅野幸長が入城し、天守などの築造が行われた。その後、元和5（1619）年に浅野氏に代わって徳川頼宣が入城し、二の丸の拡張や砂の丸などを増築した。そして、明治4（1871）年の廃藩置県による廃城になるまで御三家のひとつ紀州徳川家が領有した。現在では国の史跡に指定されている。

和歌山城に関する発掘調査はこれまで31次を数え、数多くの遺構・遺物を検出している。平成19・20年度に実施した吹上口の調査（第30・31次調査）では絵図にみえる吹上橋の石垣張り出し部や西堀石垣などを確認した。また、第31次調査の一部として実施した二の丸西部では、土塀基礎石組・石組溝・石組集水枡がセットとなる大奥の排水施設などを確認している。



調査位置図

今回の調査は、第31次調査に続く二の丸整備のための事前発掘調査として計画されたものである。発掘調査は和歌山市教育委員会文化振興課の指導のもと、財団法人和歌山市都市整備公社が和歌山城管理事務所から委託を受けて実施した。

現地における調査は、平成22年8月4日から平成22年12月9日の期間で行った。

## 調査内容

前年度に実施した第31次調査の二の丸西部で行った2-1区では、文政8（1825）年に描かれた『和歌山二ノ丸大奥當時御有姿之図』にみえる土塀（基礎石組）や石組溝・石組集水枦などの排水施設や「西御小座敷」に相当するとみられる建物基礎構造（根石群）など貴重な遺構が良好な状態で遺存していることが明らかとなった。そのため、今回の調査は第31次調査で検出した土塀基礎石組と石組溝の東側延長部にあたる同絵図に描かれた鍵の手状に屈折する部分を確認するために、平成16年度に行った第29次調査第3区の東側隣接地に調査区を設けた。また、同絵図に描かれている、藩主が生活した場の一部とみられる「梅之間」やその東側に面した坪庭、旧県立図書館撤去時に発見されていた浅野期埋没石垣などの遺構確認のための計2ヵ所の調査区を設けた。これらの調査区は前年度の継続調査であることから、前者を3-1区、後者を3-2区と呼称し、調査を実施した。3-1区は東西幅4m、南北長10mで櫓台の石組階段部分2㎡を差し引き面積38㎡、3-2区は東西幅11.67m、南北長12mの面積140㎡の規模をそれぞれ測り、合計面積178㎡が調査対象である。

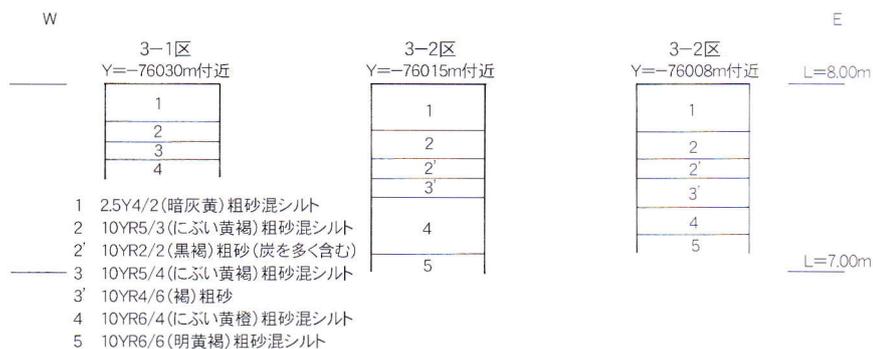
各調査区において江戸時代末期の遺構面を検出した。調査地の現地表面での標高は約8.0mを測るが、江戸時代末期の遺構面を検出した深さは3-1区が約40cm、3-2区は深さ60～70cmであり調査区間において高低差がみられた。以下、調査区毎の基本層序と遺構概略を説明する。

### [基本層序]

3-1区の土層把握は、第31次調査2-1区を参考とし、共通性を明確にする様に努めた。基本土層は、第1層（2.5Y4/2（暗灰黄）粗砂混シルト）が約20cm、第2層（10YR5/3（にぶい黄褐）粗砂混シルト）が約10cm、第3層（10YR5/4（にぶい黄褐）粗砂混シルト）が約10cm、第4層（10YR6/4（にぶい黄橙）粗砂混シルト）が10cm以上の厚さで堆積する。第1層は現代の表土、第2層は現代の整地土、第3層は近代の整地土である。第4層は江戸時代の整地土で、上面が江戸時代末期の遺構面であり、調査はこの遺構面を対象とした。

3-2区の基本土層は3-1区に準じるが、第2層と第4層間に上から第2'層、第3'層が堆積している。第2'層は

10YR2/2（黒褐）粗砂で、炭を多く含む現代の堆積層であり、焼土を多く混じる部分も断続的にみられることから第2次世界大戦の際に形成された層の可能性



調査地土層柱状模式図

がある。第3'層は10YR 4/6（褐）粗砂の層で、3-1区第3層に対応する近代の整地層とみられる。また、3-2区では第4層の下に、部分的ではあるが第5層の堆積を確認した。第5層は10YR 6/6（明黄褐）粗砂混シルトで、二の丸西部拡張以前（浅野期）の整地土と考えられ、第31次調査2-1区で確認した第5層（二の丸西部拡張後）とは対応しない。なお、第4層上面の一部に江戸時代後期頃の整地土とみられる第4'層（10YR 4/6（褐）粗砂混シルト）が堆積しており、この層の上面が第4層上面と同様に江戸時代末期の遺構面であり、調査はこれらの遺構面を対象とした。3-2区での各層の厚さは、第1層が約25cm、第2層は15cm、第2'層は約10cm、第3'層は10~20cm、第4層は20~30cm、第5層は約10cm以上を測る。

### [3-1区]

3-1区の検出遺構は、石組溝1条、土塀基礎石組1基、踏石1基、飛石1基、漆喰貯水槽1基がある。

石組溝と土塀基礎石組は第31次調査2-1区で検出していた東側延長部を確認したもので、前出の絵図に描かれている状況と同様に、土塀基礎石組は北に一度屈折し、約5.0mのところ再び東に屈折していた。石組溝の規模は、天端石材幅約90cm、石組天端からの深さは大奥内側が約60cm、外周通路側は約75cmを測る。底面に幅40~60cmの結晶片岩の長方形板石を敷き詰め、側面は砂岩割石を3段積み上げるものであるが、西から直線的に2.1mの地点で幅40cmに幅員を減じ、そのまま東の調査外に延びるものである。石組溝の南側面石組には排水口が1カ所みられ、大奥側から土塀の地下を暗渠でくぐり排水したものとみられる。

土塀基礎石組は幅85cmの規模のもので、東から西方向に2.9m、北方向には3.4m、北端部から再び西方向に1.8mの範囲を検出した。石材は砂岩割石を用いて組み合わせており、外面をノミで削り平坦面に加工している。第31次調査2-1区では、基礎石組は1段分の高さ約35cmの規模で検出していたが、今回の調査では、土塀基礎石組を2段分検出し、本来は基礎石組が2段（高さ約70cm）であったことが判明した。南北方向の基礎石組西側に踏石が1基、東側に飛石が1基設置されている。踏石は砂岩自然石を分割したもので、南北60cm、東西55cm、厚さ約20cmの規模を測る。前出の絵図ではこの部分に通路部から大奥内部に入るた



写真1 3-1区全景（南から）



写真2 3-1区石組溝（東から）



写真3 3-1区土塀基礎石組（東から）

めの戸口が描かれており、踏石と基礎石組間に幅約40cmを測る方柱状の石材が組み合わさって石段を形成していた可能性がある。

漆喰貯水槽は調査区北端部で検出した。漆喰を円形の桶状にした水溜で、直径1.50m、深さ65cm以上の規模を測る。標高7.55~7.60mの遺構面から作り付けており内底部は遺構面から55cm低くなっている。また、地表面から上の漆喰側壁が内部に平瓦を挟み込む構造で、厚さ約40cmの規模を測る重厚なものである。内面約5cmは特に丁寧に仕上げ塗りを施しており、現在においても水は浸透しない。

### [3-2区]

3-2区では、礎石2基(礎石1・2)、漆喰池1基、塵穴1基、土管1条(土管1)を検出した。また、攪乱坑内において石組暗渠溝1条、瓦積井戸1基、土管2条(土管2・3)、埋没石垣1基など江戸時代後期以前の遺構を確認した。

礎石は、砂岩の自然石を用いたものを3基検出したが、1基は原位置から遊離したものである。原位置を保ったとみられる礎石2基は建物の柱を据えたものとみられ、位置は前出の絵図に描かれている建物の柱位置と対応する。これらの礎石は江戸時代後期とみられる整地土(4'層)で周囲が覆われており、それより以前から据えられていた可能性が考えられる。

漆喰池は調査区南半部で検出した平面形が瓢箪形の人工池であり、前出の絵図の坪庭に描かれている。南北5.30m、東西3.56mの平面規模を測る漆喰を厚く塗り固めたもので、底面が北側に向かい低く作られており、南端部で深さ約20cm、北端部は38cmを測る。漆喰塗りの壁面には南西隅に導水口、北端部に排水口が設けられており、それぞれ土管を接続して導排水施設としている。導水口は直径16cm、長さ68cmの赤褐色の土師質焼成土管を壁面に埋め込んだもので、調査区内で2個分を検出した。土管の周囲の漆喰は他の部分と比べ灰色で硬質であることから、作り替えを行っている



写真4 3-1区漆喰貯水槽(南から)



写真5 3-2区全景(西から)



写真6 3-2区礎石1(北から)



写真7 3-2区漆喰池(南東から)

ものとみられる。排水口は漆喰壁面に直径12cmの穴を穿ち、陶器製土管を地中で繋ぎ、漆喰池の北に隣接する石組暗渠溝に接続するものである。北西隅の壁面下部には口径36cm以上、高さ54cm以上の陶器製甕を漆喰で埋め込んでおり、口縁部を斜めに壁面から開口するもので、奥が下げられて設置されている。陶器製甕の表面が露出している部分は天井部に限られ、側面及び底面は漆喰を充填している。この埋甕は類例から「観賞魚（金魚などの小魚）の寝床」とみられる。陶器製甕は、露出した部分の観察から大谷焼の可能性がある。底面の中央部には直径約60cmを測る円形台状の漆喰の高まりがある。前出の絵図には、この部分に「中島」状に石が描かれており、その台跡とみられる遺構である。池の周囲には漆喰で側壁上面に固定した石材がみられる。これらは池に配した「景石」と呼ばれるものであり、西縁部中央に結晶片岩景石1基、南東縁部に砂岩景石1基があり、前出の絵図に描かれているものと一致している。また、絵図に石橋が描かれている部分に、橋を据えたとみられる台石を東西対応する場所で各1基検出した。橋台石は景石と同様に漆喰で側壁上面に固定されおり、花崗斑岩の自然石とみられる。なお、漆喰池側壁の上面の一部が破損を免れ良好な状態で遺存しており、その標高は7.48mを測る。この標高値は江戸時代後期の生活面に近い値を示すものと考えられる。

塵穴は調査区北縁部で1基検出したもので、直径18cm、深さ18cmを測る穴の底と壁面を漆喰で塗り固めており、30×20cmの結晶片岩割石1個と組み合わせられている。塵穴とは茶室の戸口に設けられる装飾的な掃き溜め用の穴とされるものである。

土管1は、調査区北西隅部で検出した暗渠排水溝で、直径16cm、長さ56cmの赤褐色の土師質焼成土管を南北方向に2個連結したもので、延長95cmを測る。漆喰池の導水口に用いられていた土管と類似するものである。



写真8 3-2区漆喰池導水口（北東から）

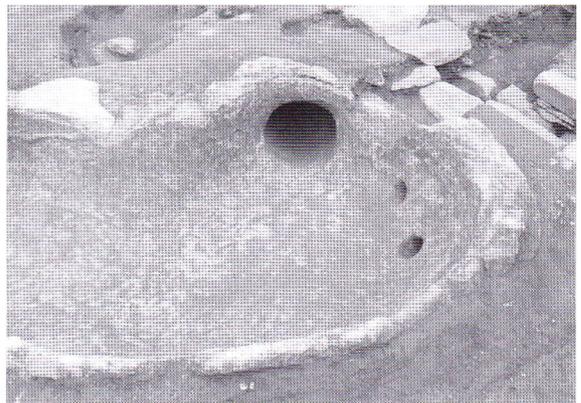


写真9 3-2区漆喰池埋甕・排水口（東から）



写真10 3-2区漆喰池中島基礎（東から）



写真11 3-2区漆喰池景石（北から）

石組暗渠溝は、漆喰池の北側の地中に東西方向に設置されており、攪乱坑等で長さ3.6mの範囲を確認したものである。底面と蓋石は結晶片岩、側面石組は砂岩を用いたもので、幅約30cm、深さ約40cmを測る。底面は東から西に低く緩やかに傾斜を持っており、西側の蓋石5点のうち、最も東側の1点だけは砂岩の板状石材であった。また、南側石組側壁にみられる漆喰池の排水土管に接する側面石組は砂岩ではなく結晶片岩石材であり、土管を設置した際に砂岩石材を除去し結晶片岩石材に積み替えたことによるものと考えられる。

瓦積井戸は漆喰池の北側攪乱坑で遺構の一部を確認したもので、厚さ2cmを測る瓦製の井戸枠を数枚立て並べて円形に積み重ねたもので、復元直径約1.2mを測る。

土管2は漆喰池の西側攪乱坑で検出した暗渠排水溝で、直径14cm、長さ39cm以上の黒灰色の瓦質焼成土管を南北方向に連結したもので、延長約1.4m分を確認した。土管3は調査区北西隅部の攪乱坑底部で検出した暗渠排水溝で、直径14cm、長さ26cmの黒灰色の瓦質焼成土管を南北方向に4個連結したもので、延長82cmを確認した。土管3の上面標高は7.00mを測り、土管2に比べかなり低い位置に埋設されており、土管自体も土管2に用いられているものと類似していることなどから、土管2と3は調査区南側からの排水のための一連のものとみられ、土管2は石組暗渠溝に地中で接続し、そこから更に北側に土管3を通じて排水したものと推定できる。

埋没石垣は浅野期のものとみられ、徳川期拡張前の西堀石垣と考えられる。石垣の上部は埋め立てのため石材が抜き取られていたが、県立図書館撤去時の攪乱部分で深さ1.3m、長さ約9mの範囲を検出した。石垣は南北方向の西側に面を持つもので、勾配は約72°を測る。石垣石材は砂岩の自然石を野面積みにしており、間詰石に結晶片岩の割石を用いている。砂岩の自然石石材は幅0.5～1.3m、厚さ0.3～0.7m、奥行0.4～0.6mの規模を測



写真12 3-2区漆喰池橋台石（南西から）



写真13 3-2区塵穴（北から）



写真14 3-2区石組暗渠溝（西から）



写真15 3-2区瓦積井戸（南から）

る。なお、砂岩石材は自然石を数個に分割したのもあり、切断面に矢穴跡や石垣刻印がみられる。また、石垣石材面をノミ加工で平坦化している部分などもある。

#### [出土遺物]

遺物は、土師器、中世土師器、中世陶器、近世土師器、近世土師質・瓦質土器、近世陶磁器（瀬戸美濃系、肥前系、京・信楽系、堺焼、大谷焼など）、近代・現代陶磁器、瓦、石器・石製品、金属製品、自然遺物などコンテナ50箱が出土した。

遺跡は近世城郭であるが、古い時期の遺物として、結晶片岩製石包丁や土師器の破片など弥生時代や古墳時代の遺物、また中世土師器皿や備前焼播鉢など室町時代のものが出土している。これらの古い時期の遺物について、昨年度の2-1区での所見を含めて考えた場合、土塀の盛土や整地土等に混入して他の場所から搬入されてきた可能性が高いものと考えられる。

近世の土師器は、焙烙、皿がある。特に皿はロクロ成形のものである。近世土師質・瓦質土器は、瓦質香炉・釜、土師質火鉢・土管などがある。陶磁器については、瀬戸美濃系では染付端反碗など、肥前系では染付丸碗・小杯・皿など、京・信楽系では灯明皿など、堺焼は播鉢、大谷焼は褐釉大甕・徳利など、丹波焼は褐釉徳利などが出土している。近代陶磁器は、3-2区の漆喰池から産地不明のものが一定量出土した。瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、滴水瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦などの他、道具瓦として、塙瓦、鬼瓦、塀瓦、輪違瓦などがあり、出土量の主体を占める。石器・石製品は、結晶片岩製石包丁や砂岩砥石など、金属製品は鉄製の鋸・角釘などがある。自然遺物は、貝類や魚骨、スッポンの甲羅などがあり、その他の遺物として、漆喰、壁土などが出土している。特に、3-2区の漆喰池周辺からは漆喰が多量に出土した。

#### まとめ

調査の結果、3-1区及び3-2区で江戸時代末期までの遺構面を検出した。遺構は、3-1区で石組溝1条、土塀基礎石組1基、漆喰貯水槽1基を検出した。土塀基礎石組と石組溝はセットとして機能しており、これらの遺構は大奥内部と外周通路を隔てる役割を果たし、二の丸拡張時に一連のものとして築造されたものであり、絵図に描かれた鍵の手状に屈折する部分を絵図通りに検出



写真16 3-2区埋設土管3（東から）



写真17 3-2区石垣（南西から）



写真18 3-2区石垣刻印・矢穴（西から）

した。また、それ以前の段階では屈折せず東に直線的に延びていたことも明らかにすることができた。

3-2区では礎石2基（礎石1・2）、漆喰池1基、塵穴1基、土管1条（土管1）を検出した。これらの遺構のうち礎石2基と漆喰池1基は前出の絵図に描かれている建物や坪庭の状況に合致し、特に漆喰池は検出した遺構の遺存状況が良好である。漆喰池は、江戸大聖寺藩邸跡や彦根城表御殿跡などの大名屋敷の庭園に検出された事例がみられるが、絵図に描かれた事例は少なく、今回の調査で検出した漆喰池は絵図に描かれた細部の状況が一致しており希有で貴重な事例であるといえる。

なお、江戸時代末期の生活面について、3-1区検出の漆喰貯水槽は標高7.55~7.60mの遺構面上に設置しており、これは外周通路部の生活面の標高値を示すものである。また、3-2区検出の漆喰池側壁上面の標高が7.48m、その周囲の遺構面は7.40mであり、これは大奥内部の生活面の標高値の一端を示すものとみられる。以上のことから、外周通路部の生活面は大奥内部と比べ20cm程度高い標高値であったものと考えられる。

また、3-2区では攪乱坑内において石組暗渠溝1条、瓦積井戸1基、土管2条（土管2・3）、埋没石垣1基など下面の遺構を確認した。これらの遺構は、江戸時代後期の整地土（第4・4'層）に覆われた状況であることから、それ以前の時期の遺構であるといえる。また、礎石2基（礎石1・2）についても同整地土（第4'層）で周囲が覆われていることから、江戸時代後期以前の時期の遺構であると考えられる。石組暗渠溝は漆喰池の排水管が接続されており、南側の土管2からも排水が流れ込み、土管3を経て北側に排水していた状況を推定でき、さらには北側延長上に位置する石組溝を経由し、石組集水枡から石樋を通り西堀に排水した状況を復元することができる。埋没石垣は浅野期の西堀石垣と考えられ、徳川期の二の丸西部拡張により地中に埋没していたものである。調査によって、この石垣の構造や規模などを明らかにしたが、和歌山城内において現在みられる石垣と同様のものは全く見当たらず、浅野期段階の古い時期に位置付けることができ、和歌山城の石垣変遷を明らかにするための基準資料といえる。

以上、今回の調査により、遺構の遺存状況等を明らかにし、二の丸西部を復元整備するための基本資料を追加することができた。

（北野隆亮）

#### 【参考文献】

三尾 功 『近世都市和歌山の研究』 思文閣 1994年

『史跡和歌山城 御橋廊下復元及び二之丸西部・西之丸第一期整備報告書』 和歌山市まちづくり推進室和歌山城管理事務所 2007年

## 4. 川辺遺跡 第14次確認調査

調査地 和歌山市中筋日延字野座112番2

調査面積 50m<sup>2</sup>

### 位置と環境

詳細は、川辺遺跡第13次確認調査を参照。この第14次調査は、工事計画範囲における遺構の有無等を確認するために実施した確認調査であり、これまで調査例のなかった川辺遺跡北東部の状況把握を目的として実施したものである。

### 調査内容

今回の調査は、開発計画範囲約3350m<sup>2</sup>の内、擁壁工事路線及び防火水槽設置予定部分を対象に幅2m、調査区長5mの調査区を5ヶ所設定して行った(第1図)。調査地の基本層序については、これまでの調査と類似する状況であったため、これらの層序を参考として褐色粒を多く含む鎌倉時代の堆積層(第4層)と古墳時代から奈良時代を中心とする遺構面のベース層(第6層)を基準層ととらえて、これらの層位関係から堆積した時代を考慮し、各調査区の対応関係を考えて層位番号を付した。なお、各層位の堆積時期は、上位から現代の水田耕作土(第1層)、江戸時代の耕作土(第2層)、室町時代から江戸時代にかけての耕作土(第3層)、鎌倉時代の堆積と考えられる褐色の鉄分粒を多量に含むことを特徴とするにぶい黄色系の粗砂混シルト(第4層)、奈良時代から鎌倉時代にかけての堆積土(第5層)、黄褐色系のシルト質土である縄文時代後期から弥生時代中期と考えられる堆積土(第6層)の他、部分的に確認した無遺物層と考えられる褐色系の円礫を含む粗砂層(第7層)に分けられる。以下、遺構面の状況や堆積状況など今後の調査に繋がる成果を得ているので調査区ごとに概略を説明する。

第1区(写真1)は、比較的薄く堆積する第4層の下面が遺構面と考えられる第7層となり、第5・6層の堆積は認められない。この第7層上面は標高約11.40mであり、中央部から西側は直上層である第4層が西側に向かってやや落ち込む状況を確認した。この第7層は円礫を含む粗砂層で遺物の出土はなく、これまでの調査で検出していた扇状地の堆積に類似する層位と考えられた。

第2区は、対象地の南東隅部に設定した調査区である。遺構面と考えられる第6層上面は標高約10.90mでほぼ水平に堆積し、遺構面の標高が最も低くなり、下位層ほど粘質が強くなる傾向であ



調査位置図

る。このことは、当調査区周辺が低湿地であることを示すものと考えられる。

第3区(写真2)は、遺構検出面である第6層上面(標高11.10~11.20m)において溝1条とピット1基を検出した。また下層調査のサブトレンチにおいて第6層が4単位に細分できる状況を確認し、上位層内に微量の遺物が含まれていることを確認した。

第4区(写真3)は、遺構検出面である第6層上面(標高約11.20m)において重なり合う2条の溝を検出した。またサブトレンチによる下層調査の結果、標高10.50mまで掘削を行ったものの第6層内における遺物の出土は認められなかった。

第5区は、遺構面と考えられる第6層上面は標高約11.20mでほぼ水平に堆積し、遺構検出の結果、遺構は確認できなかった。サブトレンチによる下層調査の結果、標高10.50mまで掘削を行い、地表面から1.45mの深さ(標高10.55m)まで縄文土器が含まれていることを確認した。

## まとめ

今回の調査成果は、これまで調査例のなかった川辺遺跡北東部の状況の一端を明らかにすることができたことである。今回の調査では、第3区とその西側の第4区において溝を主体とする遺構を検出し、確実に対象地まで遺跡が広がっていることが確認できた。また第1区で確認した第7層は、北側和泉山脈の雄ノ山峠から派生する扇状地末端部の堆積と類似し、当調査地から北側に向け地表面の上昇する傾向からみても確実なものと考えられる。また第2区では第6層上面が30~50cm程度落ち込み、土質からみても低湿地になるものとみられる。この状況は、第4~6次調査と類似する扇状地末端部に形成された微低地部の様相と考えられる。また微量ではあるものの第6層内から出土した縄文土器は、川辺遺跡の特徴のひとつである縄文土器の分布範囲の広がりを示すものであり、対象地周辺にもこの時代の遺構が存在する可能性も考えられる。(井馬好英)

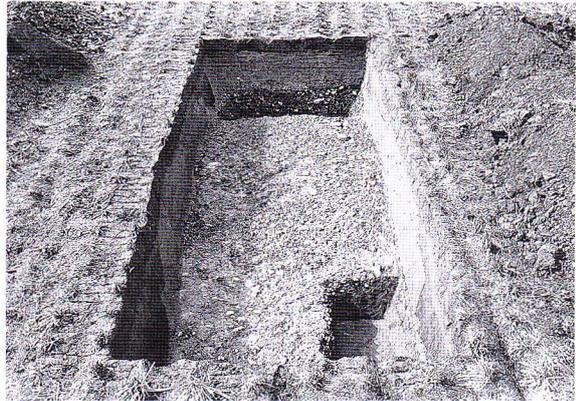


写真1 第1区全景(東から)

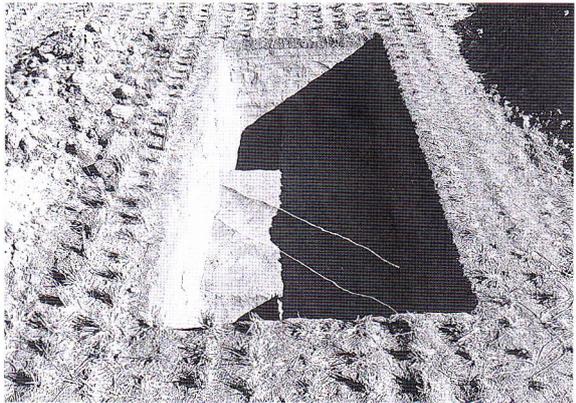


写真2 第3区全景(西から)

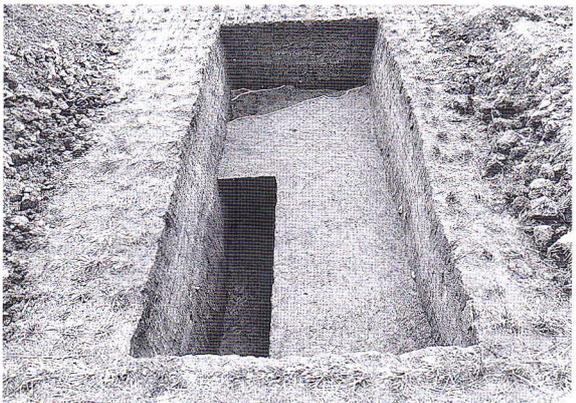


写真3 第4区全景(北から)

## 【参考文献】

「川辺遺跡第14次確認調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報 -平成21年度-』和歌山市教育委員会 2011年

## 5. 田屋遺跡 第3次確認調査

調査地 和歌山市直川字須井田377番地

調査面積 100m<sup>2</sup>

### 位置と環境

田屋遺跡は、標高5.0m前後の沖積平野に立地する集落遺跡である。今回の調査地対象地は、阪和自動車道と紀ノ川が交差する地点の北東約700m、阪和自動車道の西側下に位置する。

調査地周辺における過去の調査では、昭和56～61年に調査地の東約1km地点において財団法人和歌山県文化財センターが行った一般国道24号バイパス建設に伴う調査があり、この調査では弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴建物約50棟の他、掘立柱建物や溝、旧河道、平安時代の掘立柱建物などが検出され、田屋遺跡が当該期の集落遺跡であることが明らかとなった。また、平成17年には阪和自動車道の西側において財団法人和歌山市文化体育振興事業団が六箇井用水の北及び南側両地域を対象として埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を行った。その結果、六箇井用水の南側一帯は紀ノ川の氾濫原であったものの、北側では直川用地内において奈良時代から平安時代の溝や自然流路が検出されている。この調査結果を受けて、和歌山県教育委員会は田屋遺跡西端の一部範囲拡張を行い、現在調査地周辺は田屋遺跡の範囲内にあたる。その後、平成20年に和歌山市教育委員会が直川用地内において公共施設建設に伴う確認調査を行い古墳時代の溝のなどを検出したことから、同21年に財団法人和歌山市都市整備公社が第2次発掘調査（以下、第2次調査）を実施している。この調査では、第1・3区において安定した沖積層（黄褐色シルト）を検出し、その上面において古墳時代前期のものと思われる溝及び土坑、古墳時代中期の掘立柱建物、古墳時代後期に埋没した溝の他、平安時代前期に埋没した大溝、遺構の重複関係から奈良時代から平安時代



調査位置図

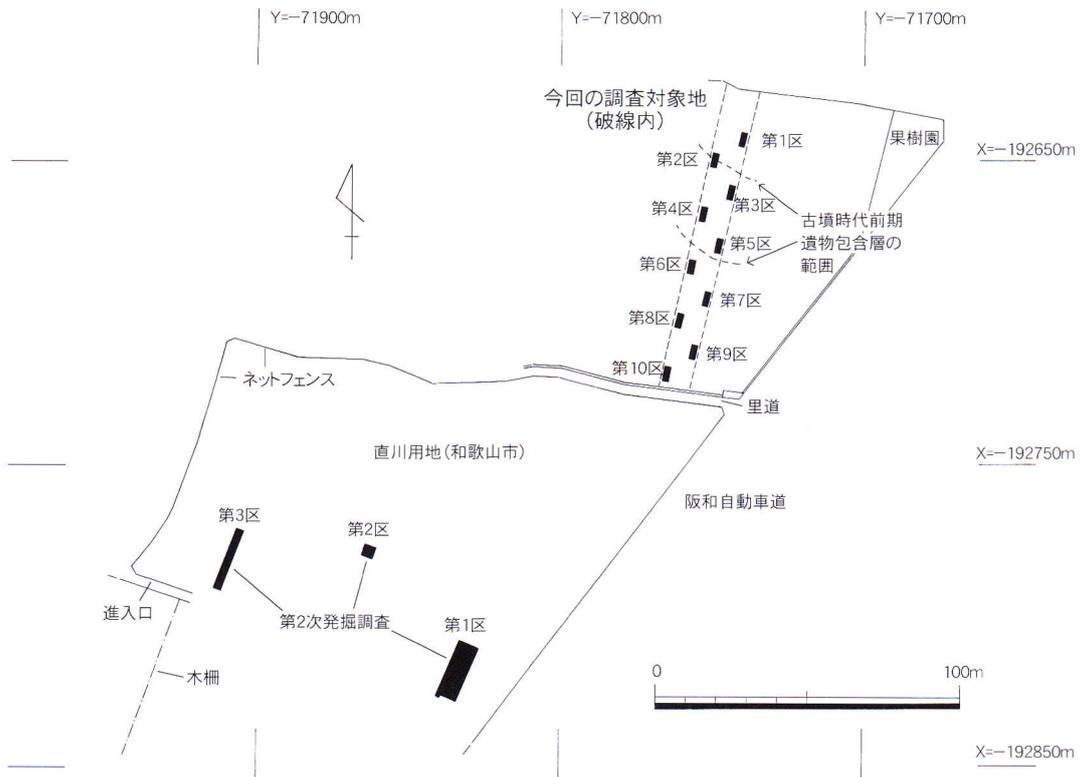
のものとみられるピットなど多数の遺構が検出され、第2次調査地周辺に古墳時代から平安時代の遺構が高密度に展開している状況が明らかとなった。また第2区周辺は粘質土の堆積が厚く認められ、直川用地の北半部には沼地または湿地が存在すると考えられている。

## 調査内容

今回の調査は、南北長5.0m×東西幅2.0mの調査区を10カ所設け、北から第1～10区とし行った。

調査地の現況は、水田である。調査地の基本層序は、包含される遺物の時期及び土質から大きく1～6層に分層した。第1層は黄灰色細砂混シルトであり、現在の水田耕土である。第2層は江戸時代から近代にかけての耕作土（暗灰黄色粗砂混シルト）であり、明黄褐色の鉄分の沈着面によって4～6単位に細分が可能である。第3層は室町時代から江戸時代にかけての耕作土（黄灰色細砂混シルト）とみられるものであり、鉄分粒の沈着面によって2～3単位に細分が可能である。第4層は鎌倉時代の耕作土（黄褐色粗砂混シルト）と考えられるものであり、鉄分粒の沈着面によって1～3単位に細分が可能である。第5層は平安時代の耕作土（黄灰色細砂混粘土）とみられるものであり、この第5層も鉄分粒の沈着面によって1～2単位に細分が可能である。第6層は明黄褐色系の粗砂混シルトであり、少なくとも3単位（第6a～6c層）の堆積を確認した。この第6層は無遺物層であり、土色及び土質から判断して紀ノ川の沖積作用によって自然堆積したシルト質土と考えられる。またその上面は、古墳時代の竪穴建物や溝、土坑及びピット、落ち込みを検出した遺構検出面である。

遺構は、第1・2・4・6～10区の各調査区において、古墳時代のものと考えられる竪穴建物や溝、土坑及びピットを多数検出した。また第3・5区では第6層上面の落ち込みと、その上部に堆



調査地区割図

積した古墳時代前期の遺物を一定量含む遺物包含層を確認した。

第1区では、第6層上面において溝8、土坑5の他、ピット2基を検出した(写真1)。遺構検出面の標高は、4.40m前後を測る。

第2区では、第6層上面において溝7、土坑4の他、ピット1基を検出した(写真2)。遺構検出面の標高は、4.45m前後を測る。その他、調査区北端から南へ約2.0m地点において、後述する第3区で検出した古墳時代前期の遺物を一定量含む灰黄褐色細砂混シルトの落ち込み1の北側肩部を検出した。

第3区では、第5層掘削後の標高4.40m前後において、灰黄褐色系の細砂混シルト(落ち込み1)が全面に堆積していることを確認した。

第4区では、第6層上面においてピット26～28・31・34などを検出した。遺構検出面の標高は、4.40m前後を測る。さらに調査区の全面に第3区において検出した古墳時代前期の落ち込み1が展開していることを確認した(写真3)。

第5区では、第3区で検出した古墳時代前期の落ち込み1が調査区の全面に展開していることを確認した。第2～5区で検出したこの古墳時代前期の落ち込み1は、第6層が落ち込む微低地に堆積した遺物包含層と考えられる。またその範囲は、第2～5区周辺と考えられる。

第6区では、第6層上面において堅穴建物2、溝6、土坑3の他、ピット24を検出した(写真4)。遺構検出面の標高は、4.45m前後を測る。

第7区では、第6層上面において溝5、ピット21・22の他、小溝1条などを検出した(写真5)。遺構検出面の標高は、4.45m前後を測る。

第8区では、第6層上面において堅穴建物1、溝3、土坑2の他、ピット2基を検出した(写真6)。遺構検出面の標高は、4.45m前後を測る。

堅穴建物1は、調査区の中央部において北西から南東方向に西側肩部を検出した方形の堅穴建物と考えられるもので、遺構の性格及び残存深を確認する目的で西側肩部に沿って一部掘削を行っ

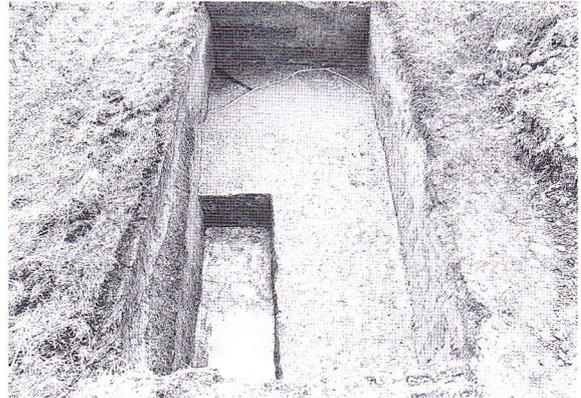


写真1 第1区全景(北から)



写真2 第2区全景(南から)



写真3 第4区全景(北から)

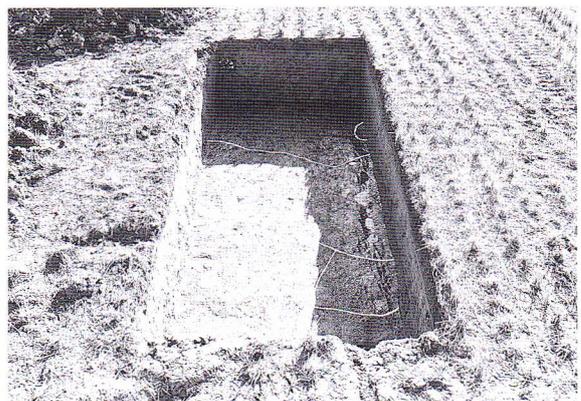


写真4 第6区全景(北から)

た。その結果、遺構底面が水平で西辺に沿って幅約10cmの壁溝を検出したことから竪穴建物と判断した。

第9区では、第6層上面において溝1・2、土坑1、ピット8・11・12などを検出した(写真7)。遺構検出面の標高は、4.45～4.55mを測り、西から東にかけて低く傾斜する。

溝1は、調査区の北壁際をほぼ東西方向に延びる南側肩部を検出したもので、検出長1.8m以上、幅60cm以上、深さ32cmを測る。遺構覆土は3単位に細分が可能であり、第1層が灰黄褐色粗砂混シルト、第2層が同じく灰黄褐色粗砂混シルト、第3層がにぶい黄褐色粗砂混シルトである。時期については、古墳時代前期と考えられる。

第10区では、第6層上面においてピット1を検出した(写真8)。遺構検出面の標高は、4.45～4.50mを測る。

遺物は、各遺構の遺構覆土や遺物包含層から遺物収納コンテナに2箱分が出土した。これらの遺物には、弥生土器・土師器・製塩土器・須恵器・瓦器・中世須恵器・中世土師器・国産陶磁器・瓦・石器がある。遺物の出土傾向として、古墳時代初頭から前期にかけての脚台Ⅲ式を主体とする製塩土器(24点)が比較的多く出土していることが注目される。

## まとめ

今回の調査では、第6層上面において古墳時代初頭から前期を主体とする遺構群を確認することができた。これらの遺構群は、竪穴建物や溝の他、土坑などの居住を示す遺構が主体となる状況から、調査地周辺には当該期の集落が展開しているものと考えられる。また出土遺物の種別として、弥生土器や須恵器の出土が極端に少ないことが指摘できる。このことは、今回確認した古墳時代集落の存続時期が弥生時代までは遡らず、古墳時代中期までは降らない可能性を示していると考えられる。(藤藪勝則)

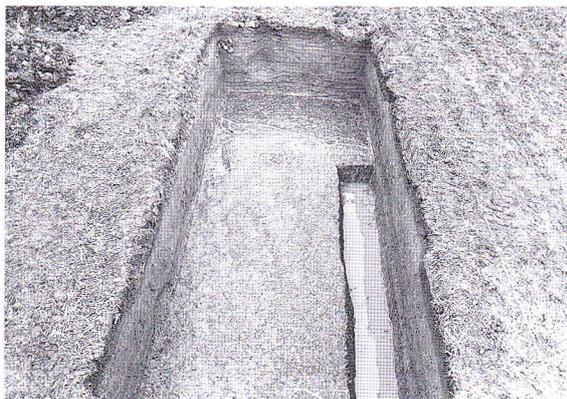


写真5 第7区全景(南から)

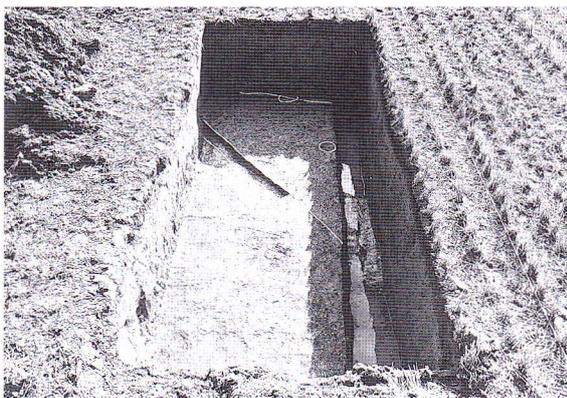


写真6 第8区全景(北から)

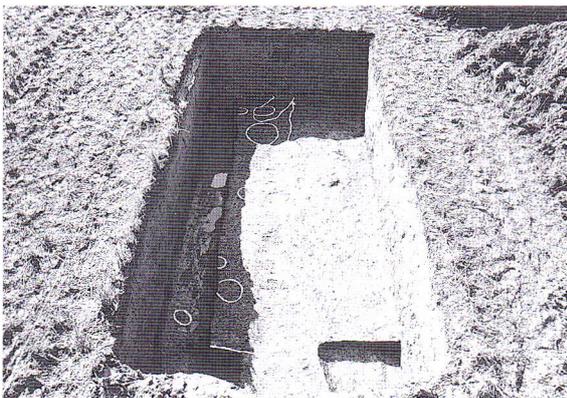


写真7 第9区全景(北から)



写真8 第10区全景(南から)

## 6. 雑賀崎台場跡 第2次確認調査

調査地 和歌山市雑賀崎地内

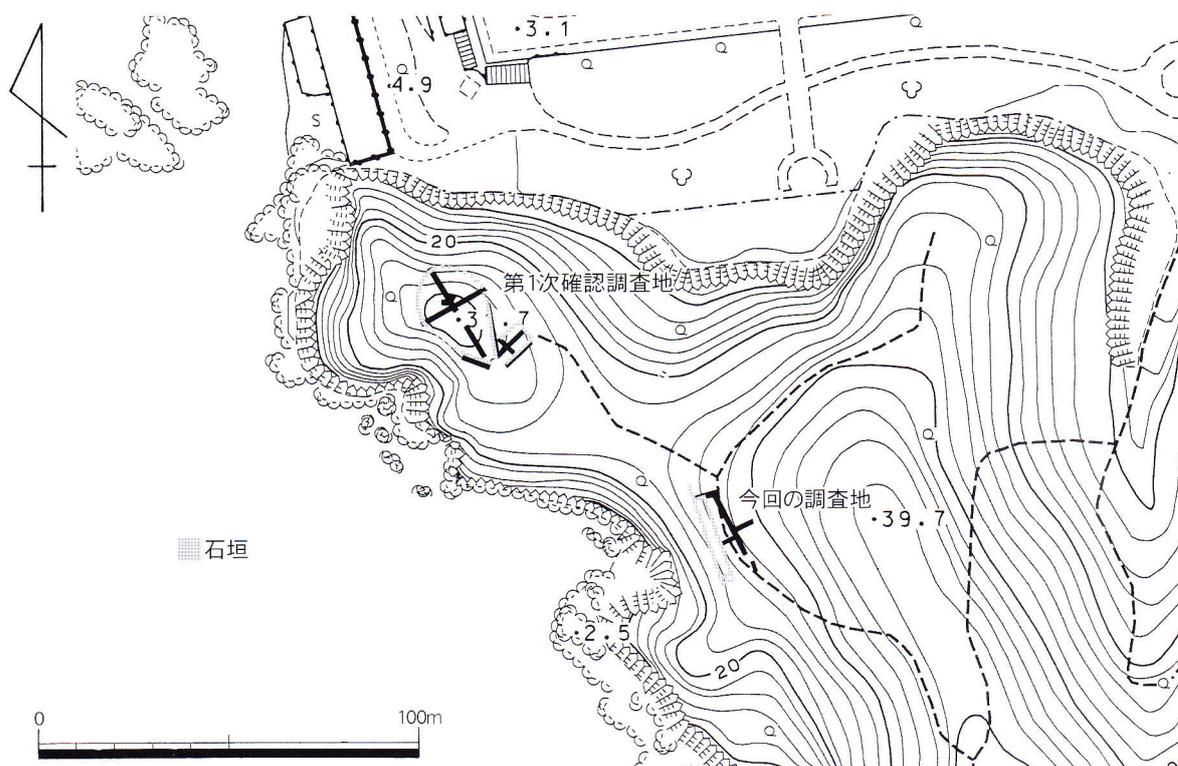
調査面積 39.3㎡

### 位置と環境

雑賀崎台場跡は、和歌山市雑賀崎の北端部、紀伊水道に突出した俗称「トンガの鼻」または「台場の鼻」と呼ばれる岬の先端部分に位置する（写真1）。

雑賀崎台場跡は、通称「カゴバ」台場遺跡と呼ばれ、江戸時代末の砲台跡として知られてきた遺跡である。本遺跡における過去の調査では、平成19年に和歌山市教育委員会の委託を受け財団法人和歌山市都市整備公社が遺跡確認を目的として第1次確認調査を実施している。この調査では、台場の本体部分である岬先端部に構築された馬蹄形に廻る石垣とその上部に盛られた土塁及び、土塁に囲まれた平坦面の他、台場南東部に設けられた方形壇を廻る石垣及び、その上部平坦面について調査を行い、台場構築に際して行われた大規模な整地と、石垣及び土塁の構築方法が明らかとなり、台場上部平坦面では、先端部を紀ノ川河口に向けたV字状石積遺構を検出している。また方形壇の上部平坦面では礎石や柱穴を確認することはできなかったものの、方形壇の構築に伴う整地土を確認し、台場に付属する建物の存在を想定する成果が得られている。さらに遺跡の形成時期は、台場構築の際に持ち込まれた整地土に含まれる遺物などから18世紀後半以降のものと考えられている。

今回の調査は、台場本体から南東約90mに位置する岬の南斜面に構築された石垣及びその上部に盛られた土塁の他、その東側に広がる平坦面について、石垣及び土塁の所属時期ならびに建物等の有無を確認する目的で行った。調査地の標高は、27.00m前後を測る。



調査位置図

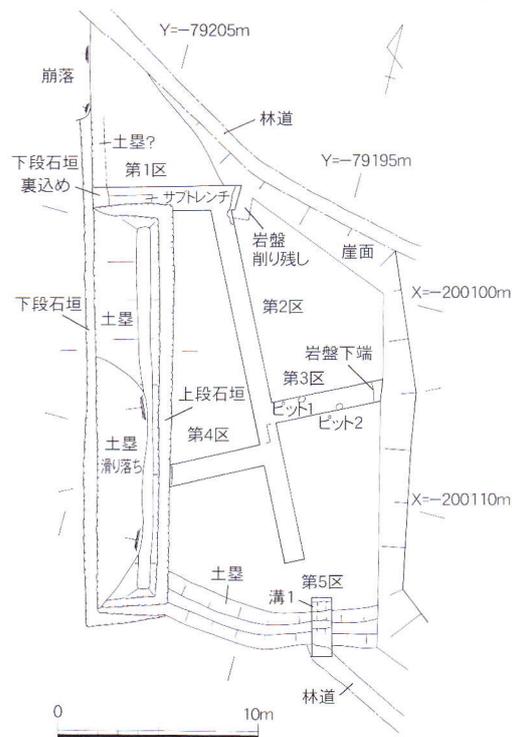
## 調査内容

今回の調査対象地は、調査開始前の現状確認において、平坦面の東側に結晶片岩の岩盤を急傾斜に削り込んだ崖面を確認したことから、岬の南斜面をL字状に削り込み平坦面を造り出していることが想定された。また石垣及び土塁は、平坦面造成範囲の西端に構築された下段石垣（写真2）と、その上部に構築された土塁及び上段石垣（写真3）の異なる2つの石垣を確認した。さらに、平坦面の南端にはほぼ東西方向に土塁状の低い高まりが認められた。このような遺跡の現状に基づき、平坦面の成形及び造成状況、さらに上段及び下段石垣の構築状況を確認する目的で第1区を設定した。また第2～4区は、平坦面の成形状況及び建物の有無を確認するために設定したもので、第5区は平坦面南端に遺存する土塁状の高まりと敷地内への進入路の有無を確認する目的で設定したものである。

調査地の基本層序については、調査地全体に腐葉土である灰黄褐色粗砂混シルト（第1層）が堆積している。この第1層を除去した下位層が近代から現代の耕作土とみられるにぶい黄褐色粗砂混シルト（第2層）である。この第2層を除去したところ、調査範囲のほぼ全面において岬を形成する結晶片岩の岩盤を検出した。ただし、第2区南端部及び第5区では、岩盤は認められず0.5～1cm大の結晶片岩礫を多く含む明褐色粗砂混シルトが堆積しており、さらに第4区西端部では5～10cm大の結晶片岩礫を多く含む黄褐色粗砂混礫が堆積している。これらの堆積土は、第4区西端において検出した上段石垣の基底石がその直上に据えられていること、また第5区では溝1がこの上面から掘削されていることから、平坦面造成に伴う整地土とみられる。また、後者が平坦面の西端で検出され比較的大きな礫を含むことから、岩盤を削り込み平坦面西端に押し出された整地土であり、前者が自然地形として残る岩盤上の凹凸を水平に不ならすために調査地周辺から持ち込まれた整地土と判断した。さらに第1区西端では、上段及び下段石垣構築状況を確認するために設定したサブトレンチにおいて平坦面造成に伴う整地土を確認した。この整地土は、3単位に細分が可能であり、にぶい赤褐色粗砂混シルトの上下に0.5～1cm大の結晶片岩礫を多く含む褐色粗砂混シルトが2単位堆積するもので、上部に上段石垣を構築することを想定し強固な地盤を形成しようとする意図が感じられるものである。

以上の基本層序及び上段石垣及び遺構の検出状況から、下段石垣によって西端を区画された平坦面は遺跡形成時に岩盤成形によって造り出されたものと判断でき、遺構検出面は岬を形成する岩盤直上及び前述した整地土の上面と考えられる。またその標高は、南北方向では第5区南端部で27.03m、第2区北端部で26.73mを測り、南から北に向かって低く傾斜する。また東西方向では、第3区東端部で26.87m、第3区西端で26.92m、第4区西端部で26.54mを測り第2区周辺を頂点として東西に向かって低く傾斜する。

遺構は、平坦面の西端に構築された下段石垣とその上部に構築された土塁及び上段石垣の他、第



調査地区割図及び遺構全体平面図

3区ではピット1・2、第5区では土塁及び溝1などを検出した。以下、主な遺構について述べる。

下段石垣は、調査区の西端部において検出したもので、石垣の天端石及びその裏込めを検出した。また上段石垣は、下段石垣の裏込め石材の直上に基底石が据えられていることを確認した(写真4)。よってこれらの石垣の構築順序としては、まず平坦面の西端を限る石垣である下段石垣を構築したのち、その上部に上段石垣を積み上げていることが分かる。さらに上段石垣の基底石が下段石垣の天端石ではなく裏込め石材の直上に据えられていることから、上段石垣と下段石垣は同時期に構築されたものと考えられる。次に、サブトレンチの調査成果として、下段石垣の裏込めが平坦面の造成に伴う整地土を切り込み施工された痕跡を確認することができなかった(写真4)。よって、下段石垣の構築は平坦面の造成と併行して行われたと考えられる。

下段石垣の規模は、南北の残存長24.5m、南端部で東西幅4mを測るもので、南端部は約83°の角度で東へ屈曲して延びる。またその高さは、現状で0.9~1.2mを測る。石垣の構造は、長さ40~90cmを測る結晶片岩の板石を使用し、小口面及び石材の長側辺を法面に向けて積み上げる野面積みで、基底石及び天端石には比較的大きな石材が使用されている。また石垣法面の傾斜角度は、約60°で、南西隅角部は算木積みとなる(写真5・6)。さらに第1区において検出したこの石垣に伴う裏込め石材は、15~30cm大の結晶片岩の割石である。

上段石垣は、土塁の北及び東面、さらに南面にのみ「コ」の字形に石垣をめぐらせた構造物であると考えられる。その規模は、南北長20.0m、東西幅3.8m、石垣の高さ1.4m、土塁の高さ33~52cm、総高は1.7~2.0mを測る。またこの上段石垣の南端部は下段石垣南端ラインには合致せず、その上端から30~50cm北側に基底石が設置されている。上段石垣の構造及び傾斜角度は、下段石垣と同様であり、基底石の下部構造として胴木等は存在しなかった。さらに、上段石垣の北東及び南東隅角部は算木積みとな

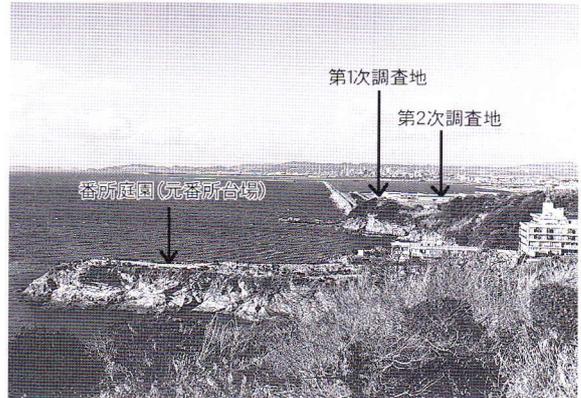


写真1 調査地区遠景(南から)



写真2 下段石垣(西面、北西から)



写真3 土塁及び上段石垣(東面、北から)

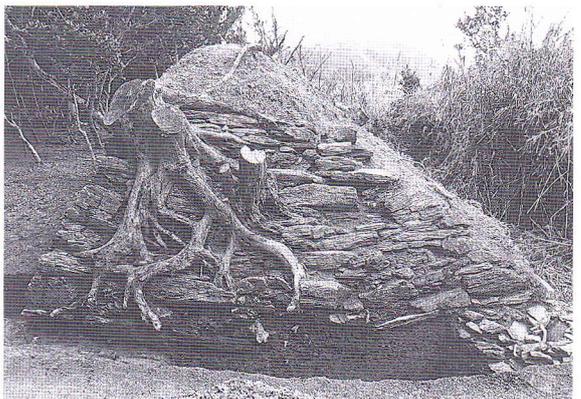


写真4 上段石垣・土塁(北面、北から)

る。最後に土塁の傾斜角は約45°であり、石垣の傾斜角と比較してやや緩やかとなり、その南半部はやや西側へ滑り落ち傾斜が乱れている。

第3区において検出したピット1・2は、岩盤を円形に掘り込んだものであり、直径35～40cm、深さはピット1が20.3cm、ピット2が11.3cmである。またこれらのピットは、その中心間の距離が1.9m（約1間）を測ることから掘立柱建物の柱穴になるものとする。

第5区で検出した溝1は、検出長0.9m、幅38～47cm、深さ12cmを測るもので、遺構覆土からオランダ呉須を用いた瀬戸・美濃系磁器染付の端反碗が出土したことから19世紀中頃のものと考えられる。土塁は、今回の調査対象地である平坦面の南端を区画するもので、総延長は10.6mを測る。構造は、褐色粗砂混シルト内に10～20cmを測る結晶片岩の割石や棧瓦を無造作に混ぜ積み上げたものである。

調査で出土した遺物には、近世土師器、近世瓦質土器、肥前系磁器染付碗、瀬戸・美濃系磁器染付碗の他、国産陶磁器、瓦、土製品、石器などがある。その出土量は、遺物収納コンテナに2箱である。

### まとめ

今回の調査では、岩盤成形による平坦面の西端に構築された下段石垣、またその上部に構築された土塁及び上段石垣、さらに上段石垣背後の平坦面では柱穴と考えられるピット1・2の他、平坦面の南端を区画する土塁及び溝1を検出した。

これらの遺構群の時期については、第5区において検出した溝1の覆土に含まれていた瀬戸・美濃系磁器染付碗が19世紀代中頃以降のものであることから、江戸時代末期とするのが妥当と考える。また石垣及び土塁等の構築技術の類似性から、第1次調査によって確認した台場本体とは時期的に併行関係にあるものとする。

雑賀崎台場跡は、幕末という日本社会が大きく変革するその契機となった異国船の来航に関わる遺跡として、歴史的に重要なものとする。（藤藪勝則）

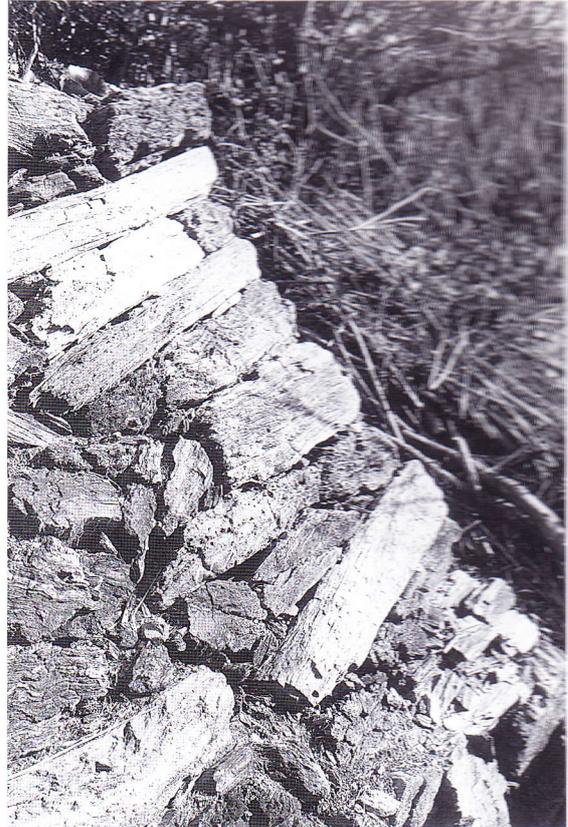


写真5 下段石垣南西隅角部（北西から）

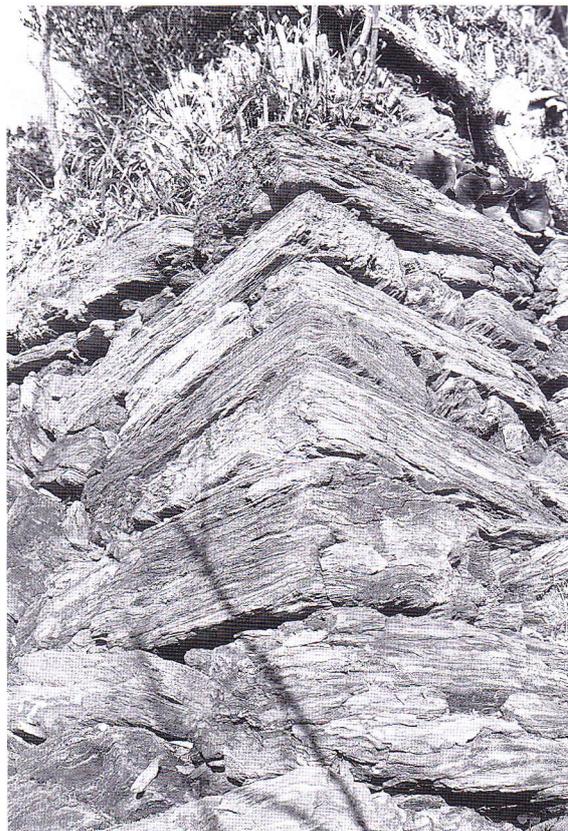


写真6 下段石垣南西隅角部（南から）

## 7. 鳴神V遺跡 第11次発掘調査

調査地 和歌山市秋月字飯垣304番5

調査面積 21m<sup>2</sup>

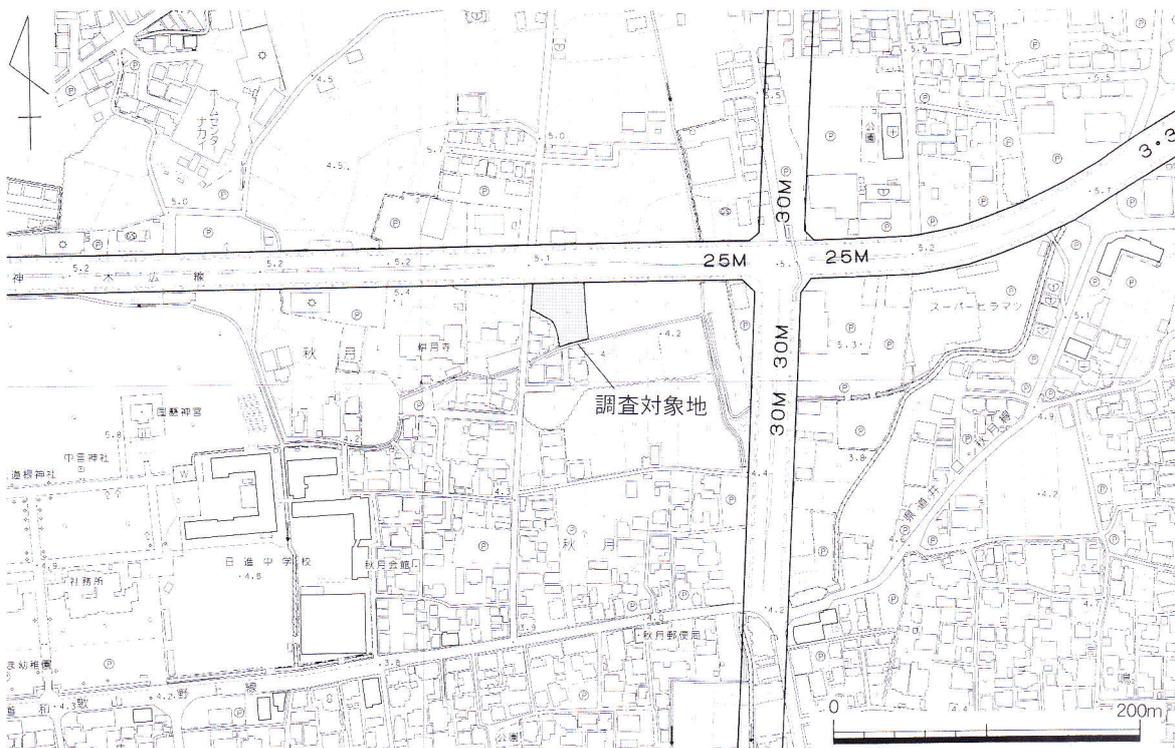
### 位置と環境

鳴神V遺跡は、紀ノ川下流域南岸の和歌山平野ほぼ中央部に位置する。遺跡は、平野部でも標高4.0m程度の微高地にあたる地点に位置し、数多くの遺跡が密集して分布する地域に所在する。この遺跡は、紀伊国の一宮として知られる日前・国懸神宮の周辺に広がる秋月遺跡の北東部に接する弥生時代から鎌倉時代にかけての遺跡として周知されており、特に古墳時代の竪穴建物や掘立柱建物、方墳などが検出され、古墳時代の集落跡として位置づけられている。

### 調査内容

今回の調査は、鳴神V遺跡の中央部に計画された店舗建設に伴うもので、対象面積約1,120m<sup>2</sup>のうち浄化槽設置部分を調査対象として実施したものである。

調査地の基本層序については、地表面における耕作土から今回確認した最下層まで10単位に分層できた。土層は、上位から灰色系のシルト混粗砂である現代の水田耕作土（第1層）、その床土に相当する黄褐色系のシルト混粗砂（第2層）、明確ではないものの江戸時代頃の堆積と考えられる暗灰黄色系のシルト混粗砂（第3層）、江戸時代以前と考えられる黄褐色系の細砂混シルト（第4層）が堆積する。その下層に堆積する第5～7層は鎌倉時代までの遺物を多量に含む遺物包含層とともに灰黄色系のシルト質の土層である。そして、第7層の下面が今回の調査で遺構を確認した遺構面である。また第7層以下の状況は、北及び東壁面直下に設定したサブトレンチによって確認したもの

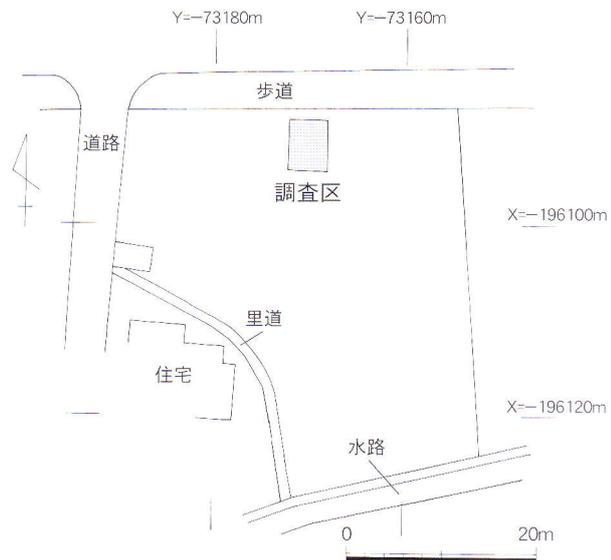


調査対象地位置図

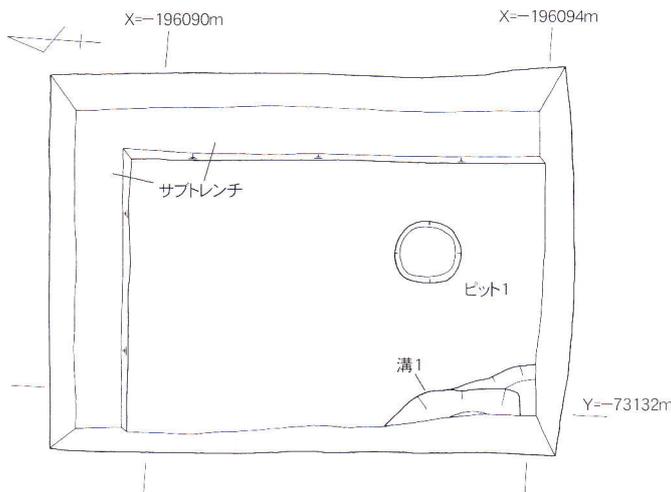
で、にぶい黄色のシルト混細砂層（第10層）が、調査区のほぼ中央部から南側は大きく落ち込む地形を形成し、その落ち込んだ上部にオリーブ褐色系の粗砂（第9層）及び黄褐色系のシルト混細砂（第8層）が堆積している状況であることを確認した。この第10層の地形傾斜は上位の堆積まで影響を及ぼし、第3層以下の層位が南に向かって厚く堆積している状況も確認できた。なお、今回の調査では第8～10層内における遺物の出土は認められなかった。第7層下面の遺構面は、北から南に向かって緩やかに下降する状況で、その標高は2.8m～2.5mである。また遺構面の状況は凹凸がみられ、部分的に攪拌された状態であり、植物の根によって攪拌されたものと考えられた。遺構は、古墳時代前期の溝状遺構1条（溝1）と鎌倉時代とみられるピット1基（ピット1）である。

今回の調査によって出土した遺物は、その大半が遺物包含層である第6・7層から出土したもので、その種類には、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、中世土師器、緑釉陶器、焼締陶器、輸入磁器、土製品、石器などがある。これら出土遺物のなかで比較的良好なものについて説明する。

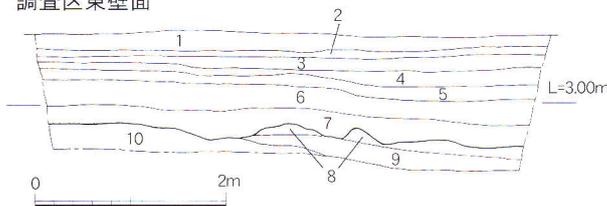
まず1～4は須恵器である。1は杯蓋、2・3は杯身であり、飛鳥時代から奈良時代にかけてのものである。4は肉厚で浅い器形の鉢とみられる個体で、外底面に竹管によるとみられる文様が施されている。5・6は土師器である。5は外面にハケ調整が施された



調査区位置図



調査区東壁面

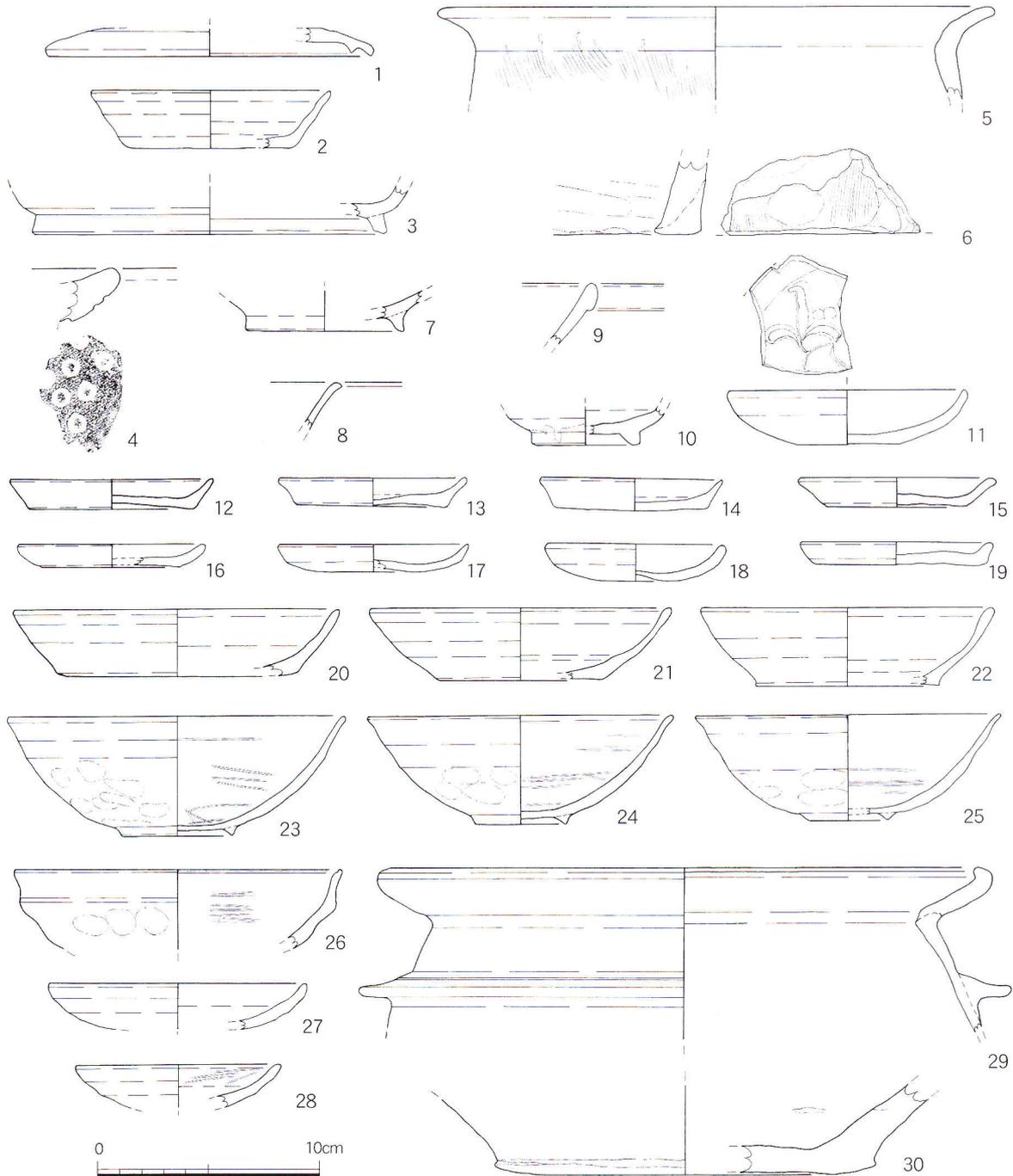


- 1 5Y4/1(灰)シルト混粗砂
- 2 2.5Y5/3(黄褐)シルト混粗砂
- 3 2.5Y5/2(暗灰黄)シルト混粗砂
- 4 2.5Y5/4(黄褐)細砂混シルト
- 5 2.5Y5/2(暗灰黄)粗砂混シルト(褐色粒を含む)
- 6 10YR4/2(灰黄褐)粗砂混シルト
- 7 2.5Y4/1(黄灰)シルト混細砂
- 8 2.5Y5/4(黄褐)シルト混細砂
- 9 2.5Y4/4(オリーブ褐)細砂
- 10 2.5Y6/4(にぶい黄)シルト混細砂

遺構平面図及び土層断面図

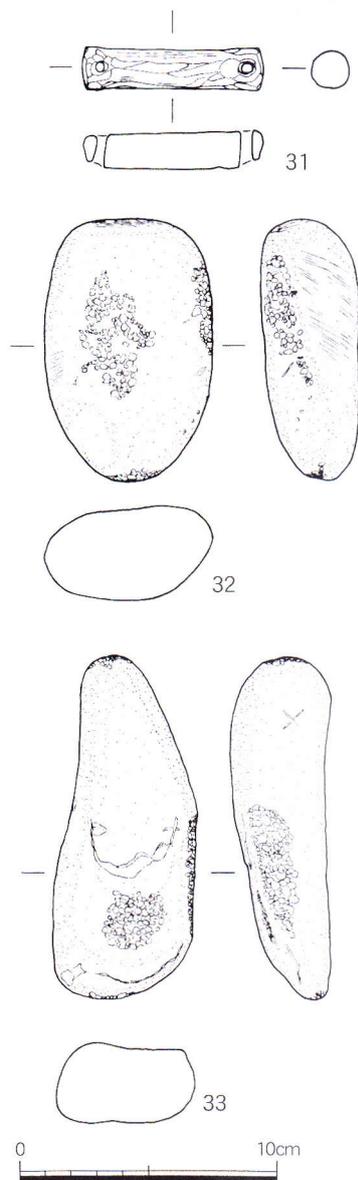
甕、6はカマド底部であり、ともに須恵器と類似する時期の遺物と考えられる。7は比較的足高の黒色土器A類椀である。また8は緑釉陶器椀口縁部小片である。9～11は中国製白磁である。9は端部が玉縁となる碗の口縁部で、この器形となる底部が10である。11は底面が露胎の皿で、内面には片切彫りによって花文を描いている。これらの土器は、平安時代までの遺物群で、出土量は比較的少ない。

12～22・29は中世土師器である。12～19は口径8.0～9.0cmにまとまりがある小皿で、ロクロ成形の後、底面を糸切り等によって仕上げるもの（12～16）や手づくね成形による指頭圧痕によって仕上



遺物実測図 1

げるもの（17～19）がある。また大半の個体は、褐色から赤褐色に発色しているものの、19は灰白色の色調をもつ。20～22は、口径13.0～15.0cm、器高3.0～4.0cmの法量をもつ皿である。ともに口クロ成形によって口縁部を仕上げているもので、ほとんど残存していない底部は糸切りによるとみられる。29は口径26.9cmの釜である。大きく外反する口縁部は、端部を内側に屈曲させて丸く仕上げている。また肩部には鏝が貼付されている。23～28は瓦器である。23～25は口径13.5～14.5cm、器高5.0cm程度にまとまりのある椀で、ともに口縁端部がやや外反する特徴がある。また23には不明瞭ながら内底面に連結輪状文が観察できる。26は口縁部下に稜をもつもので、口縁部内面に1条の沈線が廻る。27・28は皿で、28の内面には暗文が施されている。また30は、常滑焼甕の底部で、底径17.4cmを測る。これらの鎌倉時代に比定できる遺物群は圧倒的に多くをしめる。土器以外では、土製品として有孔土錘（31）や石器として叩石と磨石の複合石器（32）や叩石（33）がある。有孔土錘（31）は、長さ7.1cm、幅1.6cm、厚さ1.5cmのもので、重量24.5gである。石器はともに砂岩の自然石を用いたもので、32が405.6g、33が390.1gの重量である。以上の遺物出土位置は、7～10・12・15・18・20・21・28が第7層で、他のものはすべて第6層である。



遺物実測図2

### まとめ

今回の対象地内で文化振興課が行った確認調査において確認していた遺構面は、対象地北東部の微高地部（標高約3.3m）と南西部の微低地部（標高約2.5m）があり、その形成過程と形成時期について不明瞭であった。しかし、本発掘調査においてその傾斜部分を調査したことによって対象地内の状況を明らかにすることができた。今回の調査の結果、ベース層である第10層が南側に向かって落ち込んでゆく状況を確認し、その上部に堆積した第8層上面から古墳時代前期の遺構（溝1）を検出した。このことは、第8・9層も古墳時代以前の堆積層であることを示し、第10層の堆積時期が不明であるものの少なくとも古墳時代前期以前であることが分かる。このことから、当対象地における遺構面の傾斜は自然環境の中で形成されたものと考えられ、この微低地は南西側に向かって緩やかな谷状地形を形成しているものと考えられる。また、出土遺物からみた成果としては、平安時代から鎌倉時代にかけての遺物群が谷状地形の埋土である第6・7層に多量に含まれていたことから、この遺物群をもたらした居住域が近辺に存在することが考えられる。文化振興課が行った確認調査では対象地北東部の微高地部を確認し、さらに今回の調査によって北側も微高地となる様相であることからみて対象地北部及び東部には集落の中心である建物群等の居住域が想定できよう。

（井馬好英）

### Ⅲ. 普及啓発活動

#### 1. 書籍刊行

埋蔵文化財の発掘調査報告書を刊行し、関係機関等へ配布した。

『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報 -平成19年度(2007年度)-』(平成22年3月)

発掘調査報告書の原稿を作成し、提出した。

『和歌山市内遺跡発掘調査概報 -平成20年度-』(平成22年3月)和歌山市教育委員会発行

#### 2. 速報展等の開催

和歌山市立博物館と共催で速報展を実施した。

『「発掘・土器ドキ!昔の和歌山」-第8回和歌山市埋蔵文化財速報展-』

平成21年4月25日～6月7日 和歌山市立博物館 特別展示室

速報展に伴い調査報告会を行った。

『ミュージアムトーク「スライドで見る和歌山市最新発掘情報」』

平成21年5月16日 和歌山市立博物館 講義室

#### 3. 現地説明会等の開催

和歌山城管理事務所・和歌山市教育委員会と共催で現地説明会を実施した。

史跡和歌山城第31・32次発掘調査現地説明会

平成21年11月14日 参加者約170名

和歌山市教育委員会と共催で現地説明会を実施した。

雑賀崎台場跡現地説明会(トンガの鼻自然クラブ対象)

平成22年1月27日 参加者約30名

#### 4. 講師派遣等

財団法人和歌山県文化財センター主催の報告会に講師を派遣した。

『地室のひびき -第4回和歌山県内文化財調査報告会-』

平成21年6月28日 和歌山県立図書館(きのくに志学館)

派遣職員 藤藪勝則「太田・黒田遺跡の発掘調査」

和歌山地方史研究会主催の報告会に講師を派遣した。

『和歌山地方史研究会第30回大会』

平成22年3月7日 和歌山市立博物館 講義室

派遣職員 北野隆亮「史跡和歌山城の発掘調査 -二之丸・吹上口を中心に-」

平成24年1月20日

**和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報**

－平成21年度（2009年度）－

編集・発行 財団法人 和歌山市都市整備公社

和歌山市西汀丁36番地

印刷 株式会社ウイング

©財団法人 和歌山市都市整備公社